

第四章 元帥各神考

1. 『三教搜神大全』の各神の項目

『三教搜神大全』に含まれる記事は、恐らく出自を異にするいろいろな文献に基づき、構成されたものであると考えられる。もちろん、前半部分の多くの記事は、『搜神広記』を踏襲したものであり、そこはまた編集の方針が異なっているものと思われる。

例えば、巻一の「玄天上帝」の項目の内容は、散逸した董素皇編の『玄帝実録』に基づくものが多い。この記事と、『玄帝実録』及び『玄天上帝啓聖録』¹⁾は、重なる部分も多いが、恐らくは『玄帝実録』の記事を、『搜神広記』と『玄天上帝啓聖録』とが、それぞれ独立に、他の資料も参考にしつつ引用を行っているものと考えられる²⁾。また先に見たように、禪師の伝については、『神僧伝』から選択して引用されたものがほとんどである。『三教搜神大全』については、各神の項目の成立の背景をそれぞれ考える必要がある。しかし、すべての項目に対して詳細な吟味を加えるのは難しい面もあるため、ここでは前章までで考察した元帥神の項目を中心に、各神の特色について検討する。

2. 関元帥と解州塩池故事

関元帥は、元代には義勇武安王、明代からは関聖帝君として盛んな信仰があり、観音菩薩と並んで中国のみならず、アジア一帯で最も広く信仰される神格となっている。そのため、関帝については夥しい数の研究が存在する³⁾。ここではその全体像ではなく、『三教搜神大全』に見える故事を中心に考察してみたい。

まず『三教搜神大全』の巻三「義勇武安王」では、関元帥について次のように記す⁴⁾。

義勇武安王は、姓を関、名を羽、字を雲長といい、蒲州解良の人である。時は漢の末にあたり、涿郡の張飛とともに、劉備を助けて義兵を起こした。後に劉備と共に南陽の臥龍岡に三たび茅廬を訪ね、諸葛孔明を聘した。劉備は諸葛亮の計略により国土を分割し、天下を三分して、国号をと蜀とした。劉備は関羽を荊州の牧に任じた。その後関羽は不幸にも呂蒙の計にかかったが、節に屈せずして亡くなった。大將軍を追贈され、玉泉山に葬られた。士人はその徳義に感じ、歳時にこれを祭るようになったのである。⁵⁾

関元帥の生前の事績について具体的に『三教搜神大全』で述べられているのは、これだけであり極めて簡略である。他の資料の関帝に関する伝では、『三国志演義』に基づき様々な故事が語られるのが一般的である。有名なものだけでも、例えば「桃園の結義・温酒に華雄を斬る・寿亭侯に封ぜらる・顔良を斬る・五関を破る・華容に曹操を許す・単刀会に赴く」などの故事がすぐに想起されよう。もちろんその多くの部分は、史実に見られない故事が占めている。さらに後世の一部の関帝の伝には、これに加えて劉備と出会う



『三教搜神大全』義勇武安王 協侍は関平・周倉

前の経緯や、祖父・両親・兄弟や一族に至るまで、系譜を詳細に述べるものもある。驚くべきことに関羽の亡命の原因となった、その誅した地元の土豪の名が「呂熊」ということすら広く認知されている。むろんこれらの故事の大半は史書には見えず、後世に作為せられたものである。

しかしこの『三教搜神大全』においては、そういった有名なはずの関帝の事績については全くと言ってよいほどふれられない。この記事が書かれたのは元代と思われ、既に『三国志平話』や戯曲に見られるような関羽物語が発達していたことから考えると、これほどの簡略さはかえって奇異な感もある。

実はこの記事で重要視されているのは、北宋代に張天師の命により、関羽が解州の塩池において祟りをなす蚩尤神を退治するという話である⁶⁾。

宋の大中祥符七年（一〇一四）、解州の刺史が上奏文を奉って言う。「解州の塩池は古来より塩を産出し、その収入に課税しておりました。しかし昨年以來、塩池の水は減じ、課税に事欠く有り様。これは必ずや災異にかかるものでございましょう。そのため敢えて奏上した次第でございます。」（略）

そこで真宗皇帝は呂夷簡に詔を持たせ、解州の塩池に赴かせ祈祷をさせた。その夜、夢に一神人が戎服に金甲といういでたちで現れ、劍を持ち怒って言う。

「わしは蚩尤神である。上帝の命を奉じて、この塩池に王として君臨しておる。（略）いま朝廷はもっぱら軒轅黄帝を崇び、廟を天下のあちこちに建てておるが、軒轅はわしとは一世の仇敵である。このような不公平に我慢できず、塩池の水を枯らしたのじゃ。」（略）王欽若が奏して言う。

「蚩尤は邪神でございます。陛下は使者を信州の龍虎山に派遣し、詔して張天師をお召しになり、この邪神を退治なさるようお願いいたします。」

帝はその言葉に従い、使者を派遣して張天師を朝廷に招いた。（略）張天師は言う。

「臣は最も英勇なる神将を推挙いたします。それは三国蜀の関將軍でございます。臣がこの神を召し、蚩尤を討たせれば、必ずや功を収めましょう。」

言い終わると、天師は関將軍を呼び出し、帝の前に姿を現させた。
(略)

このような悪天候が五日続くと、雲や霧も収まり、天気は晴朗となり、塩池の水も元のように戻った。これはみな関將軍の力である。
(略) 帝は廟に「義勇」と書した額を賜り、四字の王に追封した。号して「武安王」という。宋の徽宗はその後尊号を加え「崇寧至道真君」とした。⁷⁾

つまりこの記事では、この「関羽が蚩尤を破る」の部分が大半の部分を含めており、生前の事績の部分よりはるかに長い。

そもそも関羽に関しては、六朝の『真霊位業図』⁸⁾にもその名が無く、また唐代においては「関三郎」神として、むしろ悪鬼として恐れられていたという記録があるだけで、神としての信仰はごく限られたものであった。唐代については恐らく諸葛亮を尊崇する傾向の方が強かったと思われる。そのため当初武廟に併祀されていたのも孔明であった⁹⁾。しかし現在では、「武廟」と言えば関帝廟の代名詞となっている。

現在のような関帝信仰が隆盛になったきっかけは、この「破蚩尤」の故事が人口に膾炙したためであると考えられる。そのため、先に見たようにこの故事は、『道法会元』『宣和遺事』など、多くの資料に記されているのであると思われる。

ところで、この記事ではこの「破蚩尤」について、「大中祥符年間」のことであると記す。すなわち真宗の治世であり、王欽若・呂夷簡などの名も見える。また関將軍を派遣したのは、「張天師」とであると記すのみで、第何代の誰であるとは言わない。

ところが『宣和遺事』では、この故事を徽宗皇帝の時代のこととし、第三十代天師の張虚靖が関元帥を派遣して蚩尤神を破ることになっている¹⁰⁾。

『道法会元』卷二百五十九の「地祇馘魔関元帥秘法」の末尾に「事実」という記事が見えるが、そこではやはりこの故事を徽宗代のこととする。

昔、三十代天師の張虚靖真君は、崇寧年間に徽宗皇帝からの勅書を降された。その勅書に言う。

「万里の彼方に卿を召したのは、塩池にて蛟が害をなしておるためである。卿はよく朕のためにこれを図れ。」

そこで、虚靖真君は呪符を作り香をたく、たまたま東嶽殿の廊下に行き、関羽の像を見かけると、左右に向かって尋ねた。

「はて、この神はいったいどのような神であったか。」

弟子が答えて言う。

「これは蜀漢の将の関羽でございます。忠義の神であります。」(略)

張天師が符を投げ入れると、風雲が起こり、雷電が轟き、斬首された蛟の首が池の上に浮かんだ。¹¹⁾

この記事では、そもそも塩池に害をなしていたのは蚩尤ではなく、単に蛟龍であることになっている。しかも、張虚靖は関羽のことを全くといってよいほど知らず、弟子に名前を尋ねているのである。またさらに、この後関羽は徽宗皇帝の前で非礼な態度であり、そのために罰として鄴都に降されたのであるとも記される。ただ内容から見ると、恐らくこの故事のかなり古い形は、むしろここに反映されているのであろう。

雑劇『関雲長大破蚩尤』は、この故事を劇に編纂したものである¹²⁾。ここでは張天師は第二十五代の張乾曜であることになっている。

(張乾曜が登場して言う。)

貧道は姓を張、名を乾曜といい、道号は澄素先生である。わが祖は道法を伝え、戒律は精厳である。三十二代にわたり、代々道法を伝えて我に至る。¹³⁾

ただここでは自ら「三十二代」「張乾耀」と称している。張乾耀を「二十五代」とするのは、後の『漢天師世家』などによるものであるが、どうもこういった張天師の系譜は後から作為されたもののようで、宋元の資料では時に異なる記録が見られる。またここでは関羽については、これをかなり下級の神としてこれを扱う。

(張乾耀が言う)

「大人、この神将は、姓を関、名を羽、字を雲長と申しまして、いまは玉泉山の土地神となっております。この神将を使えば、蚩尤神を破ることができますよ。¹⁴⁾

すなわち、関帝はこの時点では、玉泉山の小土地神であるにすぎない。

この雑劇に登場するのは、張天師の他、范仲淹・呂夷簡・寇準などであり、また最後には、北極馭邪院主が現れて、関羽をこの功績により、武安王に封ずる。また崇寧真君ともするが、この称は崇寧以前の故事としては些か問題があろう。

このように、関羽が塩池を収めたという故事は、『道法会元』と『宣和遺事』ではこれを崇寧年間のこととし、『三教搜神大全』と『関雲長大破蚩尤』雑劇では大中祥符年間のこととする。また関羽によって退治された妖神は、あるものはこれを蛟龍とし、あるものは蚩尤とする。両者を組み合わせて、蚩尤が蛟と化したとする場合もある¹⁵⁾。

この故事は、恐らく『道法会元』に見られる形が伝承としては古く、張虚靖の命により、関羽が蛟を退治する、というものであったろう。その後『宣和遺事』のような形に変わり、さらに改変を加えられ、大中祥符年間の故事とされたのではないかと推察する。沈徳符の『万暦野獲編』ではこの故事について次のように記す¹⁶⁾。

宋の大中祥符の甲寅（一〇一四）に至り、塩池に被害があった。そこで関壯繆が陰兵をもって蚩尤と大いに戦い、これを破った。ここ

で始めこのために祠を作った。崇寧元年（一一〇二）に至り、関羽を追封して忠恵公とした。大觀二年（一一〇八）、また武安王の号を加えた。¹⁷⁾

これが明代における通説であったと思われる。何故これを大中祥符年間の故事としたのかについては不明であるが、『宋史』の「五行志」に「(大中祥符)三年八月、解州塩池紫泉場水次二十里許不種自生」という奇瑞があったと記すことから、或いはこの史実に合わせて故事を改変したものかとも考えられる。ただ『三教搜神大全』の記事は『搜神広記』にも見えることから、大中祥符年間のこととする見解が、元代には既に成立していたことは間違いないであろう。また関元帥は『道法会元』などでは「酆都誡魔」との号で呼ばれることが多い。どうもこの称号は、先に見た「事実」などの故事と密接に関わるものではないだろうか。

3. 雷部諸天君の姓名

道教經典にしろ、通俗小説にしろ、元帥神の代表とされるのは、鄧天君・辛天君といった雷部の天君たちである。但し、温・関・馬・趙といった元帥神も時に雷部の神とされることもあり、これを截然と分けることは難しい。

儀礼においては、雷部の「天君」と上清の「元帥」を分ける考え方もある¹⁸⁾。

先天雷部は、鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢の七天天君からなり、上清は王・馬・趙・温・康・殷・岳・朱・周・方・田・楊・耿・崔・魯・陳・雍・高・謝・鄒の各大元帥からなる。

この中で「先天雷部」とされる鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢の天君は、他の多くの資料においても代表的な雷部の神とされるものである。また例えば、蘇州玄妙觀の三清殿に祭られる「十二天君」は、鄧・辛・張・陶・龐・劉・苟・畢・岳・温・殷・朱の各元帥であった。ここには陶天君の名が見えるが、これも雷部の有力な神である。

『三教搜神大全』の項目では、「辛興荷元帥」「混炁龐元帥」「劉天君」「田華畢元帥」「張元帥」などの項目がこれらの天君に関わるものであると考えられる。しかし先にもふれたように、雷部の筆頭とされる鄧天君の伝は無い。しかし、これらの項目の記事の内容は、実は『道法会元』などの内容とも通ずるものが少なく、どういった資料に基づく記載なのか不明な点も多い。例えば「田華畢元帥」の項目については次のような記載がある¹⁹⁾。

東郷の間に、姓を田、名を華という者がいた。すなわち真東の方角の雷神である。(略)誕生するにあたり、白昼に霹靂が鳴り響き、火光が天を照らした。(略)長ずるに及んで、「田」に生まれたので「田」を姓とし、「華」を指して「畢」と称した。(略)時に女媧氏が五色の土をもって補天を行っていた。女媧は度々作業を行ったがうまくいかなかった。そこで畢元帥は木火の精を助け、霹靂でもって玄精の石髓を砕いた。(略)また後には五色の火電風雷陣を作りだし、軒轅黄帝が蚩尤を打ち破るのを助けた。(略)様々な功績により、玉帝は雷門畢元帥の職に封じ、勅をもって十二雷霆を司らせた。また玄天上帝を補佐して、邪鬼を誅することとなった。²⁰⁾



『三教搜神大全』より田華畢元帥 恐らく火輪に乗る

これによれば、畢元帥は、名を田華といたことになっている。また、「辛興苟元帥」においては次のように記す²¹⁾。

雍の民で姓を辛、名を興、字を震宇という者があつた。母は張氏である。家は貧しく、薪を売って母を養つたが、生活は困窮を極めた。(略) 天帝はその至孝の心に感じ、これを天に迎えて雷門苟元帥に封じた。畢元帥とともに五方の事を司らせ、天を往来させ、幽明の中の邪鬼を退治させた。²²⁾



『三教搜神大全』より辛興苟元帥 所謂「雷公」の典型的な姿

この記事の不可解な点は、この元帥の名は「辛興」といい、恐らく辛元帥のことについて述べたものであるにもかかわらず、最後にはこれを「苟元帥」に封じていることである。すなわち、この記事は、辛元帥と苟元帥をあたかも一つの神であるように扱っている。

また『道法会元』その他の資料では、幾つかのバリエーションがあるものの、雷部の天君らの名は、一般に鄧天君が「鄧伯温」、辛天君が「辛漢臣」、畢天君が「畢宗遠」、苟天君が「苟留吉」、張使者が「張元伯」とであるとされる。

例えば、『道法会元』巻五十六では鄧天君について次のように記す。

雷部に欽火大神がある。姓は鄧、名は伯温という。昔黄帝が蚩尤を打ち破った時に、河南將軍に封ぜられた。大神は黄帝が天に登られたのを見て、將軍の位を棄てて武当山に入って百年にわたり修行を重ねた。(略) 上帝はこれを律令大神に封じた。²³⁾

黄帝が蚩尤を征伐した時に助けた、という記載は、先に見た畢元帥の所にも見られた。恐らく元来は同源の故事であったと推察される。

さらに『道法会元』巻八十二においては、帝嚳の次子隆延が辛漢臣を生んだとする。また隆延の子に黒歴という者があり、これが張元伯の父であるとする。この系譜では、鄧天君も祝融氏の一族であるとし、鄧・辛・張の三天君が姻戚関係にあるとする。しかし、これは雷部の諸天君を、ことさらに黄帝などと関連づけようとした作為的な系譜であろう。この記事の末尾には白玉蟾の署名があるが、これも些か怪しい。何故なら、先に見たように、白玉蟾は『海瓊白真人語録』²⁴⁾の中で辛漢臣について言及しているが、そこでは明らかに辛天君を漢の時代の人としているからである。もっとも、この記載自体も、辛天君の「漢臣」という名からの類推によるものと考えられ、あまり信頼の置けるものではない。

呂宗力氏などの指摘によれば、そもそも雷公の伝承自体がかなり複雑で融合的な発展を遂げており、苟天君の名も、元はといえば『搜神後記』に見える苟章の故事に由来するものであるという²⁵⁾。

また先に見たように『西遊記』では、鄧天君の名前を「鄧化」とし、張天君の名を「張蕃」とする。これからするに、雷部の天君について、道教経典と通俗文学側の資料ではかなりの相違があるように思われる。『三教搜神大全』の諸天君の記事の内容が、『道法会元』などとかなり異なるのも、この事情を反映していよう。

同様のことは他の雷部の天君の記事にも言える。『三教搜神大全』の「混炁龐元帥」の記事では、龐天君については「帥姓龐、名喬」²⁶⁾すなわち、「龐



『三教搜神大全』より龐元帥

喬」という名であるとし、劉天君については「帥諱後、東晋人也」²⁷⁾、つまり東晋の人で、名を「劉後」であるとする。しかし『道法会元』に見える姓名は、それぞれ「龐靈」「劉通」である。これも一致しない。さらに『三教搜神大全』の「謝天君」では、天君の名を「謝仕榮」²⁸⁾とする。『道法会元』などでは、「謝仙火」と称することが多い²⁹⁾。また『三教搜神大全』の「張元帥」では「飛捷報応之職」³⁰⁾とあり、これは張使者のことであると思われるが、その姓名は「張純」である。

『封神演義』などでは、これら天君の名はまた大きく変化する。『北遊記』なども、『三教搜神大全』に依拠しているにもかかわらず、これら諸天君の姓名はかなり変わっている。

しかし、これを温・関・趙元帥の記事と比べた場合、その傾向が明確に看取できよう。すなわち、『道法会元』などの道教経典においても、『三教搜神大全』の記事においても、また多くの通俗文学の資料においても、これらの元帥神の名は「温瓊・関羽・趙公明」であり、混同されることはまず無い。恐らく、雷部の鄧・辛・張・龐・劉・苟・畢などの天君については、その姓と「雷部の神である」という性格が知られるのみで、その由来については後

世かなり曖昧になったものと推察される。そのため、姓名を含めてかなり故事の変容が起こりやすかったのではないか。そして『三教搜神大全』に記されているこれらの記事は、民間において発展した諸天君の説話の一過程を捉えたものであろう。しかしながら、同時にこれらの故事がその後発展することも無かった。そのため、雷部の天君の説話は、むしろ『封神演義』に載せられているものが標準的な地位を占めるようになってしまう。

なお、『三教搜神大全』の「風火院田元帥」³¹⁾の項目には、田元帥の事績が書かれているが、これは雷部の神というより、音楽や戯劇に強く関連するものようである。但し、そこで従神として列挙されている神には、「竇・郭・賀三太尉」「金花小姐」「梅花小娘」「都和合潘元帥」「天和合梓元帥」「地和合柳元帥」「斗中楊・耿二仙使者」などの名が見える。ただこれらの神の名の幾つかは、『道法会元』の清微系の法術の中にも見える。

4. 殷元帥太子出身説話

太歳殷元帥は、元帥の中でもかなり特異な地位を占める神である³²⁾。

そもそも、太歳神の信仰は古くよりあり、歳星（木星）に反して地中を行くものとされた。古来太歳は凶神として恐れられ、王充がこれを『論衡』の中で非難している³³⁾。

太歳神が何時頃から「殷郊」という名になったかは不明である。ただこれは『道法会元』や『三教搜神大全』、また多くの通俗文学の資料において共通している。また殷元帥の由来についても、幾つかの資料の故事が一致しているものである。いま『三教搜神大全』の太歳殷元帥の箇所を見るに、次のような記載がある³⁴⁾。

殷元帥は殷の紂王の子である。その母は皇后の姜氏である。一日、皇后は宮園に遊び、地に巨人の足跡があるのを見つけた。皇后がその足跡を踏みつけてみたところ、孕んでおり、殷元帥が生まれた。生まれたときに肉の球に包まれていた。

時に紂王の寵愛を受けていたのは妲己であり、王に申し上げて言っ

た。

「皇后は奇怪なものを産みましてございます。」

そこで紂王はこれを陋巷に棄てた。(略) たまたま金鼎の化身である申真人がそこを通りかかった。(略) 真人が近づいてこれを見るに、肉の球であった。真人は言う。

「これは仙胎である。」

そこで剣をもってこの肉球を割いたところ、中から一名の赤子を得た。(略) その郊外に棄てられたことにちなみ、幼名を殷郊といった。(略) ここにおいて殷元帥は武王が紂王を討伐したのに参戦した。牧野に至ったとき、雷震子などを率いて、先鋒となって戦った。商の兵と戦うと、軍の前方の兵士は戈を逆さにして後ろの軍に襲いかかり、血は流れて柁を漂わせた。(略)

玉帝は殷元帥の孝義に感じ、また斬妖の勇あるをもって、遂に召して地司九天游奕使、至徳太歳殺伐威權殷元帥に封じた。³⁵⁾



『三教搜神大全』より太歳殷元帥

ここでは觸體を首から下げておらず、また童子形でもない

この話はそれまでに存在した幾つかの説話を統合したものとなっている。まず、巨人の足跡を踏んで妊娠したというのは、有名な后稷の説話をそのまま流用したものである。

また、肉球からの誕生というのは、太歳神の性格と関係が深いものである。唐代の太歳神の伝承によれば、家の太歳神を示す方角の地中に埋まっており、これを曝いた者には恐ろしい祟りがあるとするのが一般的であった³⁶⁾。

上元年間の末、また李氏の家では、太歳神の祟りを信じなかった。そこで太歳の方角を掘ってみたところ、ひとかたまりの肉を得た。言い伝えによれば太歳を得た者は、数百回鞭打てば難を免れるとのことであった。そこで李氏が太歳を鞭打ってみたところ、九十回あまりにして、突然飛び上がり、見えなくなった。その後太歳神の祟りがあり、李氏の一家七十二名は、そのほぼすべてが亡くなった。³⁷⁾

同じような話は『太平広記』の他の箇所にも数条見えている。すなわち太歳神は肉球の姿で顕現するものであった。殷元帥の出生説話はそのことを反映しているわけである。

また母の姜皇后は妲己に陥れられて殺され、殷元帥は棄てられたとある。その後申真人に拾われて養育された殷元帥は、年七歳にて数々の法術を身につけ、武王に味方して殷を討った。

これと同様の説話は、『武王伐紂平話』や『封神演義』にも見えるが、ただそこでは、殷郊は生まれた時すぐに棄てられたわけではなく、殷の太子として成長し、母の姜皇后が妲己のために害されるに及んで国を離れている。さらに『封神演義』の方は、殷郊が周側に加勢したとはせず、逆に殷のために殺されたことになっている。説話としては『武王伐紂平話』と『三教搜神大全』の方がより古いものを反映しているであろう。

しかし殷郊が殷の太子であったという説話は、『道法会元』巻二百四十六の「天心地司大法」や巻二百四十七「北帝地司殷元帥秘法」などではほとん

ど強調されることはない。これらの法術が記録されたのは、先にも見たように南宋の咸淳年間である。或いは「殷の太子」という説話はその後発展したものか。ただ、現存の『武王伐紂平話』が発行されたのは元代であることは間違いないが、その故事の成立については、それよりもやや早かったとも考えられる。そのためこの前後についてはにはわかには判定できない。しかしそもそも「殷の王子で郊外に棄てられたから殷郊」などという説明は、あまりにも粗略であり、これは民間において発達した説話であると考えべきであろう。なお、『三教搜神大全』共に登場する申真人は、つまり『道法会元』に見られる申霞であると考えられる。

さて『三教搜神大全』では、殷元帥の名を「唵哪吒」とであるとする。つまり殷元帥は、哪吒太子と同名であることになる。

実際、この両神には共通する部分が多い。少年神であること、同じく肉球から生まれたという説話を持つこと、かたや李天王との争い、かたや伐紂王と、共に父子相克の物語を有することなどである。この両神が古くから類似する点を有していたのか、或いは元来殷元帥の説話であったものが、哪吒太子に転用されたものかは不明確だが、『封神演義』における哪吒故事は、明らかに殷元帥の説話を襲用したものであると考えられる³⁸⁾。



太歳殷元帥像（上海白雲觀藏） ここでは髑髏を首から下げている

但し殷元帥自体、後世ではそれほど重要視されなくなる。またその故事も、もっぱら『封神演義』に描かれるものの方が知られるようになる。

なおまた、殷元帥の形象については、どうしても密教からの影響を考えざるを得ない。同じく星象に関係する神としては、斗母が有名であるが、斗母に関しては摩利支天の影響が強く感じられる³⁹⁾。殷元帥の場合、三頭六臂に変化すること、首から髑髏を瓔珞とするといった形象から想起されるのは、密教の明王との類似性である。そもそも『武王伐紂平話』に見える殷元帥の名は「景明王」であった⁴⁰⁾。

恐らく殷元帥の形象は、幾つかの明王の形象を部分的に反映したものと推察される。まずその髑髏を瓔珞とすることは、大威徳明王に似る。また童子形であるところは、不動明王に似る。そして鈴を持つところは、金剛夜叉明王に似る。またこれは憶測に過ぎないが、その太歳という名称は、大穢迹明王に似る⁴¹⁾。哪吒太子とその兄の金吒は、それぞれ毘沙門天の第三子那吒と、軍荼利明王の変化したものであることについては別に考察した⁴²⁾。恐らくは殷元帥も同様に、これら明王の形象が、古来の太歳神と結びつけられたものであろう。もっとも、その理由付けについては不明な点が多い。一つには、太歳神の猛悪な様子が、金剛夜叉明王などの性格と同一視されたものか⁴³⁾。

5. 馬元帥華光と五顯神

馬元帥華光は、元から明にかけて甚だ盛んな信仰を有した神であった。華光の由来については、黄兆漢氏の考察が最も詳しいが、その他にも幾つかの論考がある⁴⁴⁾。

この神はまた「華光大帝」「五顯大帝」などとも呼ばれる。そもそも華光や五顯神は馬元帥とは別個の神格であったが、後に結びつけられて一つの神格となったと考えられる。ただ関元帥などと違い、実在の人物ではないために、その由来についてはやや曖昧な部分もある。『三教搜神大全』の巻五「靈官馬元帥」の項は、華光について次のように記す⁴⁵⁾。

馬元帥の来歴を見るに、およそ三たび聖を躪わされた。もとは妙吉祥の化身であったが、妙吉祥が焦火鬼を焼き殺したために、釈迦如来は心を痛められ、妙吉祥を下界に降した。そこで五つの火光となって馬氏金母のもとへ投胎した。その面には三眼があり、よって三眼靈光と名付けられた。生まれて三日で戦うことができ、東海龍王を斬って水孽を除いた。継いで紫微大帝の金鎗を盗んだ。(略) また金磚三角を授かり、これは変化無辺であった。そして玉帝の命を受けて風火の神を討伐し、これを部下の風輪火輪使とした。(略) その母が亡くなったために地獄に入った。元帥は、海中を行き、天界を走り、酆都に進み、鬼洞に入り、哪吒と戦い、仙桃を盗んで、齊天大聖と敵対した。釈迦如来は元帥を和解させた。(略) 玉帝はその功績が天地に等しいものとみなし、勅して馬元帥を玄天上帝の部下としたのである。⁴⁶⁾



『三教搜神大全』より靈官馬元帥
三眼にて槍を持つが、有名な風火輪は見えない

これと同じ説話は、小説『南遊記』にも見えている。ただ『南遊記』の場合

はもっと物語が複雑に脚色されている。この物語は、恐らく雑劇『華光顕聖』に基づくものであると思われるが、現在『華光顕聖』劇は散逸しており、その詳細については分からない⁴⁷⁾。

『道法会元』などでは、馬元帥を温元帥・関元帥・趙元帥ともに四大元帥の一とする。これは『西遊記』などの通俗小説でも一貫してそうになっている。一方で『道法会元』巻二百二十六「正一靈官馬帥秘法」などでは、白蛇大将馬充や、温・王・席・黄の四将が馬元帥の配下とされるが、それらの神はこの『三教搜神大全』にはほとんど記載が無い。恐らく、先に見た鄧・辛・畢天君などの雷部の諸天君の姓名が変わってしまったのと同様に、馬元帥も本来の説話は知られなくなり、民間などにおいて独自に説話が発展したものであろう。『道法会元』巻二百二十四「金臂円光火犀大仙正一靈官馬元帥秘法」では、馬勝について「三頭九目六臂」とし、「金鎗金磚を持つ」とする。また「元帥もと姓無し」とし「午の方角に名を借りて姓を馬とした」という記述がある。だいたい、いずれの道教経典を見ても馬元帥の名は「馬勝」であると記されているにもかかわらず、『三教搜神大全』『南遊記』のどちらもそのことについては述べないのは不可解である。もっとも、先に見たように、



靈官馬元帥像（上海白雲觀蔵）

手に槍を持つが、もう一方の手に持つのは恐らく書物

『水滸伝』においては、「一個是馬靈官白蛇托化」⁴⁸⁾と述べており、全く白蛇将などとの関連が知られていないということではない。

華光が「妙吉祥の化身」とするもの、『道法会元』などには見えないが、実際にこの神の由来の一端を示すものであると考えられる。密教経典に見える妙吉祥菩薩が華光の直接の来源ではないとしても、三眼であること、金磚という武器を有することなど、密教との深い関係を窺わせるものは多い⁴⁹⁾。

また華光神は、閻帝や韋駄天尊と並んで、多くの寺院で伽藍の守護神とされていたようである。ただ現在寺院においては華光を伽藍神とするところは皆無に等しい。しかし明末の禅寺の様子を今に伝える黄檗山萬福寺では、伽藍堂に華光を「菩薩」として祭る⁵⁰⁾。恐らく、当時は広く華光を伽藍神として祭祀する習慣があったと思われる。ところが、その後華光神の信仰が衰亡したために、別の伽藍神に変えられていったのであろう。

『釈迦仏双林坐化』雑劇⁵¹⁾は、華光が四天王やその他の神々を率い、如来入滅に際して邪魔をする悪鬼を退治するという話である。また明の楊景賢の『西遊記雑劇』の中でも、華光は十大保官の一人として観音菩薩から任命されている⁵²⁾。その中で華光が自分のことについて述べるくだりは、ほぼこの『三教搜神大全』に見える故事に近い。

『警世通言』の「仮神仙大鬧華光廟」は、呂洞賓と何仙姑の名をかたる妖怪が一書生にとりつき、華光がこれを退治するという物語である。この記述から察するに、恐らく当時の杭州一帯では、華光神の信仰が相当に盛んであったと思われる。その冒頭に言う⁵³⁾。

さて、宋の頃に杭州の普濟橋に宝山院という寺があった。すなわち嘉泰年間に建てられたものである。またの名を華光廟といい、五顯神を祭ったものであった。(略)この五顯とは、すなわち五行の佐にして、最も靈驗あらたかなものである。或いは五顯神は五通神であるとも言われるが、これは間違いである。紹定年間のはじめ頃、丞相の鄭清之の重修により、樓や精舎などが増築され、その伽藍は非常に調うことになった。しかし元の時に兵火に遭い、道士や僧侶

はみな逃げてしまった。(略)時に民家として使われることもあり、甚だ凋落した有り様であったが、至正年間の始め、道士が資金を募って再び改築を行った。それからは祭祀も盛んになり、多くの参拝客が訪れるようになったことはさておく。⁵⁴⁾

この記載から見ても、華光廟は寺院と廟の性格を併せ持っていたようである。またこの「仮神仙大闢華光廟」では、しばしば華光を「華光菩薩」と称す。

道教側の資料では、『道法会元』の他では『大恵静慈妙楽天尊説福德五聖經』『太上洞玄靈宝五顕靈観華光本行妙経』⁵⁵⁾などの経典がある。『大恵静慈妙楽天尊説福德五聖經』では華光を「火犀大仙」「霊観大聖五帝大元帥」と称し、『道法会元』に通ずる称号が見られる。ただここでは五名の神として扱われており、五顕神の方の印象が強い。『太上洞玄靈宝五顕靈観華光本行妙経』は万暦年間の『統道蔵』の編集において加えられたものである。こちらも内容に特筆すべきものも無いが、時に『道法会元』の馬元帥に類した記述が見える。

なお、華光と五顕神の関係は複雑であり、それは『三教搜神大全』の中に「霊官馬元帥」の項目と「五聖始末」⁵⁶⁾の項目が併存していることから窺える。

まず『中国民間諸神』⁵⁷⁾において指摘されているように、「五顕」と「五通」「五聖」の区分はいま一つ判然としない。それによれば、五通神は邪神であり、「木下三郎」「木客」「独脚五通」「独脚五郎」とも呼ばれ、『夷堅志』などの記載によれば、婦女を拐かしたり、祟りをなしたりと、甚だ問題のある神格であった。『幽明録』⁵⁸⁾には「五通仙」が食を盗みに来たところを守護神に排される話が出ているが、これは神通力に通じた仙人ということであったと思われる。賈二強氏はさらに「五道將軍」と五通を関連づける⁵⁹⁾。むろん名称からの混同はありえようが、そこまでの影響関係を有するのかどうか、やや疑問ではある。五道將軍は、むしろ冥界の神としての性格が強い。なお五通は、単独の神であるとか、五人兄弟の神であるとか、また群妖の総

称とも解される。五頭神の方は、『明史』の礼志にも見えるほど正統的な神と見なされる。しかしそれにしても五通神との関連が全く無いとは言えない。

『三教搜神大全』の「五聖始末」は、『搜神広記』の記載をそのまま引き継いだものである。ただ、その内容には若干不明確な点がある。まず、記事の中ほどに「癸巳紹定六年三月三日、宋承節郎即張大猷」の署名がある。その末尾には「宋迪公即国史実録遍校文字胡升」の名が見える。すなわちこの記事は、前半が張大猷、後半が胡升によって書かれたものである。『搜神広記』の記事の多くは、このような署名を有していない。ある意味ではこの記事は特異なものであると言える。恐らくはある特定の記事からの引用であると考えられるが、どのような経緯で引用されたのかは不明である。張大猷は「五頭始末」の前半部において、彼らの封号などをこう記す⁶⁰。



『三教搜神大全』より五聖 中心にいる三眼の人物が華光に該当するか

五頭の神が降ってより後、国家に対して格別に功績があり、民に福祐があり、その靈験はいつもあらたかであった。これに先んじて、廟号は「五通」という名を止めることにし、大観年間には、始めて

廟に額を賜って「靈順」と称した。宣和年間には二字の封号の侯爵とされ、紹興年間には四字の侯爵とされた。また乾道年間には八字の侯爵となった。(略) 淳熙年間には初めて封号二字の公爵となり、理宗は改めて八字の王に封じた。

第一位 顯聰昭応靈格広濟王 顯慶協恵昭助夫人
 第二位 顯明昭列靈護広祐王 顯恵協慶善助夫人
 第三位 顯正昭順靈衛広恵王 顯濟協佑正助夫人
 第四位 顯直昭佑靈貺広沢王 顯佑協濟喜助夫人
 第五位 顯徳昭利靈助広成王 顯福協愛静助夫人
 王祖父啓佑喜応敷沢侯 祖母衍慶助順慈貺夫人
 王父広恵慈濟方義侯 母崇福慈濟慶善夫人
 長妹喜応賛恵淑顯夫人 次妹懿順福淑靖顯夫人⁶¹⁾

この記述では、恐らく民間で祭祀されていた五顯神が、朝廷に認められていった過程が反映されていると思われる。またこの記述のすぐ後には、五顯神の配下であった神の封号が記されている。

黄衣道士
 紫衣員覚太師
 輔靈翊善史侯
 輔順翊恵卞侯
 朝応助順周侯
 令狐寺丞
 王念二元帥
 打拱高太保
 打拱胡百二檢察
 都打拱胡靖一総管
 打拱黄太保
 打供王太保

金吾二大使
掌善罰悪判官

これらの配下の神がどのような神格かは不明であるが、その称号からは、罪人を捕らえたりする役割を担う者が多いと考えられる。

この「五聖始末」の記事からは、華光との関連性はほとんど感じられないのであるが、『南遊記』においても、華光が投胎する時に五人兄弟として生ずるという記載がある。さらに華光と五頭の関係の一端を示したのが『道藏』に収録される『五頭靈観大帝灯儀』⁶²⁾であると思われる。

まず『五頭靈観大帝灯儀』の冒頭に挙げられている五頭神とその配下の神は、『三教搜神大全』の「五聖始末」とかなりの一致が見られる。

都天威猛大元帥顯聰昭応孚仁広濟王
横天都部大元帥顯明昭烈孚義広佑王
通天金目大元帥顯正招順孚智広恵王
飛天風火大元帥顯直昭佑孚信広沢王
丹天降魔大元帥顯徳昭利孚愛広成王
助靈史相公
助順卞相公
翊応周將軍
王念二総管
黄王二太尉
令狐寺丞
善慶童子
土地真官

ただそのすべてが一致するわけではない。「王念二元帥」はここでは「王念二総管」になっているし、「史侯」「卞侯」「周侯」の三名は、「史相公」「卞相公」「周將軍」とされ、称号が若干異なっている。しかし、一致しないこ

とがすなわちこの両者が別系統の資料であることを示していよう。恐らく、五顯とその配下の神についても、それなりの伝承が当時はあったものと考えられる。

この『五顯靈観大帝灯儀』には、五顯神それぞれに対する賛などがあるが、その神としての職能は、微妙に差異があるように見える。すなわち、広済王については「賞罰が正しい」ことが述べられ、広佑王については「恩を広く及ぼす」ことが言われ、また広恵王については「公平に恵みを与える」ことが言われ、広沢王については「凶を滅する」ことが強調され、広成王については「物を利し民を愛す」ことが述べられる。むろん、それぞれ重なる部分があるが、五顯神に些かの個性の差はあったろう。或いは、後世の華光神が財神や武神などの幾つかの性格を併せ持つことは、この五顯の幾つかの面を兼ね備えた結果そうなったのかもしれない。

なお『五顯靈観大帝灯儀』では、財神としての効能をかなり強調したものとなっている。五顯に祷れば商賈の家が財をなすこと、福が得られることが何度も言われる。また注意すべきは、広成王の姿である。そこには「手に金磚を持ち、足に火輦を踏む」という記載がある。これからすれば、五顯の広成王がイコール華光であるとも言えなくはない。さらに、『太上助国救民総真秘要』⁶³⁾には「靈官五郎馬勝」という記載があった。これによれば、馬元帥と五郎という組み合わせは、それ以前にも存在したことが分かる。

四川省石門山の石窟に南宋期の「五通大帝」像がある⁶⁴⁾。この像は「独脚五通」とも呼ばれ、左足だけであり、風火輪の上に乗る。但し、この五通大帝は一神である。この像が当初から独脚であったかどうかは不明であるが、或いは「独脚五通」を反映したものであるかもしれない。賈二強氏の指摘によれば、この他にも五通には「独脚」の形象があったらしい。とはいえ賈氏も言うように、「独脚」はそもそも「独覚」の訛したものであり、一本足の意味では無かったと推察される⁶⁵⁾。独覚とは、一つには五神通を得た一角の仙人か、或いは声聞・縁覚を意味する独覚であったであろう。いずれにせよ、仏教に由来する名称であったと思われる。なお、『道法会元』中には、馬元帥に関連する法術中において、「華光五通」という表現はしばしば見えてい

る。

五通や五顯、それに華光信仰の盛んであったところは、いずれも江南で微妙に重なり合う。元來は幾つかの信仰が併存していたところ、それが華光大帝に集約されていった面があると考えられる。

但し、かつては仏道双方から重視され、盛んな信仰を有した華光であったが、明末以降は急速にその信仰は衰えていく。広東では現在も戲神として重視されているようであるが、かつてその信仰の盛んであった江南でも、華光を祭った廟宇はほとんど無くなっている。

6. 温元帥及び十太保

温元帥は東嶽大帝の配下の神将として有名な存在である。『三教搜神大全』巻五「孚祐温元帥」の項目には次のような記載がある⁶⁶⁾。

元帥の姓は温、名は瓊、字は子玉。後漢の東甌郡の人である。この地は今の浙江温州である。(略) 幼くして神明であり、七歳にして天文を学び、十歳にして儒学の経伝に通じた。(略) しかし十九歳で科挙に応じたが合格せず、二十六歳に明経、射策の科に応じたがこれにも及第しなかった。(略) 蒼龍が珠をその前に落としたので、臥して拾ってこれを口に含んだ。(略) 突然身体が変化し、顔は青く、髪は赤くそして身は青くなり、獯猛な姿となった。(略) 泰山府君はその威猛なるを聴いて、召して佐岳の神とした。(略) 玉帝の勅旨により、封じて亢金大神とした。またさらに封じて翼靈照武將軍兵馬都部署とし、玉環を賜った。(略) 宋の熙寧年間に、第三十六代張天師の飛真人が、始めて符召の法を用いて東嶽配下の神を使役した。そのときに十名の太保の位を定めた。その首となったのは温太保であった。⁶⁷⁾



『三教搜神大全』より温元帥
手に持つのは輪と剣のみ、腰に「無拘霄漢」の書を下げる

温元帥は関・馬・趙元帥とともに四大元帥の一角を占める。また温太保とも呼ばれ、その姿は狼牙棒と輪を持つことで知られている。この『三教搜神大全』の記事によれば、その輪は玉帝から賜ったものであった。もと読書人が神となった時、獐猛な姿に変身するというのは、多く見られる伝承であり、最も有名なものは鍾馗のそれであろう。温元帥のこの話も、恐らくそういった幾つかの故事からの借用であると考えられる。

なお、この記事でも張天師の代位については混乱が見られる。すなわち熙寧年間といえば北宋神宗の時代である。しかし『歴世真仙体道通鑑』『漢天師世家』⁶⁸などによれば、徽宗の時の天師張虚靖が第三十代とされるのであるから、神宗時の天師が三十六代であるのはおかしいことになる。公式な記録によれば、当時の張天師は二十八代の張敦復であるはずである。三十六代目の天師と言え、『漢天師世家』などでは元代の張宗演を指すことになる。

但し、先の張乾曜に関する記載もそうであるが、正一教の主張する張天師の系譜には作為的な面があり、その信憑性には問題もある。よってこの「第三十六代張飛清」については、単純に『三教搜神大全』の誤りであるとはい

えない⁶⁹⁾。



温元帥像（上海白雲觀蔵） 手には輪と狼牙棒を持つ

さて温太保を含む十太保については、『道法会元』に記載がある。すなわち、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の各元帥である。そしてこれらの元帥は東嶽大帝と縁が深く、「地祇法」と密接な関連があるものである。ただ十太保の中心となるのは、温元帥ではなく、張元帥であることも多い。地祇法系の法術では、『道法会元』の卷二百五十七「東平張元帥秘法」では張元帥が、卷二百五十四「東嶽温太保考召秘法」では温元帥が主となっている。

張元帥も勇猛な神としてよく知られている。『三教搜神大全』の「斬鬼張真君」に見える張元帥の説話は、次の通りである⁷⁰⁾。

張元帥の姓は張、名は巡。(略)唐の玄宗時の進士出身である。睢陽の県令となったが、安祿山の乱に遭った。(略)元帥は孤塁となった城を守り、臨機応変にして古法に拘泥しない戦法により、前後三百余戦を戦い、百戦百勝であった。(略)真に古今において忠義を貫いた人物である。後に唐や宋の時に、宝山忠靖景佑福德真君に封ぜられた。⁷¹⁾

すなわち張元帥とは、安祿山の乱の時に忠義を貫いて奮戦したことで有名な張巡のことである。同様の事績を持つ許遠も、「副帥許元帥」として封じられている。

温元帥と張元帥の記事にはあまり関連性が無いようにも見えるが、ポール・カツ氏の指摘によれば⁷²⁾、温瓊は『地祇上将温太保伝』⁷³⁾では、唐の将郭子儀の配下であったことになっている。これによればすなわち温元帥も、安祿山の乱の頃の武人ということになる。しかし『三教搜神大全』の記事では、温瓊は完全に「書生」出身ということになっており、全く異なる伝承となっているのはやや不可解である。ただ『地祇上将温太保伝』を校正し、その補遺を撰した黄公瑾は南宋の人であるとされ、武将であったという伝承の方が先に成立していたことは間違いない。というより、『三教搜神大全』の記事の方が不自然であり、作為的である。

この『地祇上将温太保伝』では、東嶽大帝の配下を太保と呼んだことや、また三十代天師の張虚靖が宣和年間に東嶽廟を訪れ、そこで温太保と会い、地祇法を広めたことなどが記される。この伝においては、また東嶽大帝の第三子炳靈公が大きな役割をはたしている。『道法会元』などの温元帥の記載も、恐らくはこの伝承に沿ったものと思われる。

なお張巡に関しては、范純武氏に詳しい論考がある⁷⁴⁾。それによれば、張巡・許遠などは元来厲鬼として信仰されたものが、徐々に性格を変じていったとされる。その姿も元来は「赤髪青面に牙出ず」という悪鬼の如きものであるのが普通であった。また張巡は後に「東平忠靖王」といった封号を与えられ、また三国の張飛が名を変えて転生したという伝承も語られるようになる。

このような張巡の性格は、関羽とよく似た面があろう。すなわち、いずれも忠義を尽くした後に非業の死を遂げており、そして厲鬼、すなわち怨霊系の神と見なされていた。『地祇上将温太保伝』に見える温元帥や孟元帥にしても、少なからずこういった性格があると思われる。恐らく、酆都・地祇法系の神とは、多かれ少なかれこういった厲鬼的な性質を持つものであり、それだからこそ強力な神将として扱われたのであろう。

また『地祇上将温太保伝』には、十太保の一員である孟元帥が「孟雲」、

韋元帥が「韋彦」という名で登場する。これによれば、孟元帥も韋元帥も温瓊と同時期の人ということになる。しかし孟元帥については、『三教搜神大全』の「孟元帥」の項に伝があるが⁷⁵⁾、その名は「孟山」となっており、「仁義孝慈」の人であることになっている。

元帥は姓を孟、名を山といい、仁義孝慈の人であった。その功績は
 万古に尽きない。今に至るも人の賞賛するところとなっている。孟
 元帥が獄官となっていた時に囚人を解き放ったその一事を見ても、
 その実情を窺うに足るのである。(略) 元帥は年も押し詰まった頃、
 父母のことを案じていると、監獄の中から数百の泣き声が響いた。
 それはみな、切にその両親を思うものであった。元帥は言う。

「親が無いわけではないのだ。会える機会が無いだけなのだ。」

そこで元帥は彼ら囚人を哀れみ、彼らを膝下に抱えて泣いて約す
 と、囚人もまた泣いて元帥に誓った。

「いま冬二十五日には解き放つので、正月五日に戻ってくるように。」
 これを実行したところ、果たしてその約束を違えた者は一人もい
 なかった。⁷⁶⁾



『三教搜神大全』より孟元帥

この『三教搜神大全』の記事によれば、孟山は獄吏であり、義によって囚徒を解き放ち、それによって罪に陥り死に至ったところ、玉帝の勅によって「酈都元帥」の位を与えられたとする。こちらも、温瓊の伝同様、『地祇上将温太保伝』におけるものとは全く異なっている。恐らく孟元帥にしても、本来の伝承とは別に説話を作為したものであろう。なお、この話はそのまま『北遊記』において転用されており、孟元帥は孟山といい、囚人を逃がした徳により元帥に封じられたとする⁷⁷⁾。

さらに『三教搜神大全』には十太保の一である康元帥、及び鉄元帥について記事があるものの、これらにはあまり事績らしい事績が見えない。鉄元帥については、『三教搜神大全』「鉄元帥」は次のように述べる⁷⁸⁾。

玄天上帝が坎離の二気となった亀蛇を討伐した時、ために雲が九天の下に裂けた。そして鉄元帥の勇力によって山海が押され、亀蛇が踏みつけられた。そこで元帥は歩虚をもって玄天上帝とともに天に昇り、「猛烈元帥」に封じられた。元帥は玄天上帝とともに、玄冥の守護の任に当たることとなった。⁷⁹⁾



『三教搜神大全』より鉄元帥

鉄元帥に関しては、このように武王伐紂の時に玄天上帝を助けたということで、玄帝との関係がむしろ強調される。



『三教搜神大全』より康元帥

また康元帥については、『三教搜神大全』には次のような記載がある⁸⁰⁾。

天帝はまた民が康元帥の徳を褒め称えるのを聴いて、これを封じて「仁聖元帥」とした。そして四方の社令の管理を司らせた。元帥は左手には金斧を執り、右手には瓜錘を執り玉璽と周旋させる。⁸¹⁾

これらの太保神は、時に「十二太保」「十三太保」「十四太保」などとも呼ばれるが、東嶽大帝の部下である他に、太歳神の配下であることもある。太保神は、総じて「地祇」系の神であるが、「地司」である太歳神の部下であるとも考えられたためであろう。一般に冥界に関係する武神を指しているようである。むしろ道教では、酆都・地祇系の神に対して使われる。

ただ十太保について各神の事績はいまひとつはっきりとは分らない。通俗文学作品においては、『水滸伝』の豪傑の一人戴宗が「神行太保」と呼ばれ、

また『残唐五代史演義伝』⁸²⁾などの五代史物語では、李晋王の義子たちが「十三太保」と称されている。一方で『北遊記』では、太歳殷元帥の部下として「十三太保」が登場する⁸³⁾。

なお、『道法会元』巻二百五十八の「東平張元帥專司考招秘法」によれば、十太保のそれぞれの名は以下の通りである。

温玉
李文真
鉄勝
劉仲
楊文貴
康応
張蘊
岳昊
孟雲
韋彦卿

また同じく『道法会元』巻百五十五の「混元六天妙道一炁如意大法」では、次の通りである。

温玉
李真
鉄勝
劉琦
姚正
張蘊
康応
岳勝
孟雲

韋彦

これら太保の名は『地祇上将温太保伝』に見えるものと共通する部分があるものの、『三教搜神大全』の記載とはほとんど一致しない。また『北遊記』に見えるものともかなり異なっている。

さて北京の東嶽廟においては、現在でもその瞻岱門の殿に十太保を祀っている。その十太保とは、『道法会元』に見えるものとは少しく人員が異なっている。北京東嶽廟の十太保は次の通りである⁸⁴⁾。

翊靈昭武使 温元帥
 順靈昭化使 李元帥
 協靈昭濟使 鉄元帥
 鎮靈昭賛使 劉元帥
 通靈昭佑使 楊元帥
 宣靈昭慶使 張元帥
 広靈昭恵使 康元帥
 安靈昭応使 岳元帥
 顕靈昭利使 孟元帥
 永靈昭助使 韋元帥

すなわち、温・李・鉄・劉・楊・張・康・岳・孟・韋の各太保である。

ここでは、「太保」は「元帥」と呼ばれているが、実際にこういったケースは多い。ただ、「元帥」の中でも雷部の一部が特に「天君」と称されるように、「太保」の場合は特に冥界に関わる神を指すのが普通である。このうち、冥界の神としてはやはり楊太保の方が知られていると思われる。その楊元帥については、『三教搜神大全』に「楊元帥」という項目がある⁸⁵⁾。

元帥は時に漢の廷尉の長に任じられた。案件として、主の玩器を盗んだ者があった。時に皇帝は廷においてこれを殺すよう命じたが、

全く聞き入れなかった。また別の案件では、寵愛された者が官を侮辱するということがあり、笞殺の刑とした。皇帝は特赦を施して赦そうとしたが、これも聞き入れなかった。また別の案件では、三老の中に汚吏がいて捕まったが、朝廷の権官が圧力をかけて釈放しようとした。元帥はこれも聞き入れなかった。また別の案件で、友人であることを恃んで法を曲げようとした者があり、賄賂を元帥に送ったが、これに一瞥も与えなかった。⁸⁶⁾



『三教搜神大全』より楊元帥

楊元帥は生前剛直な官吏であったことから、その後冥界の神として封じられたとする。楊元帥は実在の人物で、『後漢書』に伝のある楊彪である。董卓の遷都の言に抗するなど、実際に直言で知られる人物であったことが伝に記されている。「先見の明」という言葉は、この故事に由来するものである⁸⁷⁾。しかし『道法会元』などに見える楊太保が、イコール漢の楊彪であると単純には思われない。『道法会元』の一部では、「姚正」すなわち姚太保と書かれることもある。恐らくこれも姓が楊である元帥神について、後から楊彪の故事が付会されたものであろう。

岳太保については、これも岳元帥とどのような関係にあるかは些か不明確である。

蘇州玄妙観の十二天君の中に岳天君が含まれ、また上海白雲観の像の中に岳元帥がおり、また四大元帥を温・岳・馬・趙の組み合わせとするなど、現在では岳元帥は祭祀の対象となることが多い元帥である。



岳元帥像（上海白雲観蔵） この形象からも岳飛であると思われる

しかしこの岳元帥とは、南宋の武将である岳飛が神として祀られたものであると推察される。上海白雲観の岳元帥像などは、その称号を「盪虜鄂王」とし、槍を持った岳飛らしき像となっている。宋代に寧宗によって岳飛は「鄂王」に封じられていることから、この岳元帥の像が岳飛を指していることは明白であろう。神霄各派の法術の発展が南宋であったことからすると、その神格化について『道法会元』にあまり反映されていないのは当然とも言える。

もし『三教搜神大全』に岳元帥の記事があり、元帥は岳飛であると断じていれば問題は無かったのであるが、残念ながら『三教搜神大全』にそのような記載は無い。そもそも『道法会元』などによれば、岳太保の名は岳勝、或いは岳昊である。これをもって考えても、岳元帥である岳飛と岳太保とは関

連性が薄いことが看取できよう。

以上、十太保と幾つかの元帥の関係について見てみたが、『道法会元』『地祇上将温太保伝』に見える太保神と、『三教搜神大全』に見える温元帥・張元帥・康元帥・鉄元帥・孟元帥・楊元帥の各元帥は、その名も事跡がほとんど一致しないことが分かる。比較的著名な事跡がある温元帥や張元帥にしても、かなり資料によって差異がある。その他の元帥については、極端な話、同じであるのは姓のみと言ってもよい。恐らく『三教搜神大全』に見られる元帥神の説話は、後世民間などで別に発展したものであって、『道法会元』などとの道教経典との関連性は薄いのである。

なお、張巡・岳飛、それに先に見た関羽などの元帥が、いずれも忠義を尽くした末に鬼となったものであることは興味深い。酈都・地祇系の神は、温瓊を含めて、实在或いは实在と思われた人物が、死後怨霊となり、それが元帥神として採用されたものが多いのは偶然ではないだろう。そしてこのような神は比較的事跡や個性がはっきりしているところから、後世においても有力な元帥神として発展していったのであると思われる。それに比して、同じ酈都地祇系の神でも、鉄元帥や孟元帥や楊元帥、それに韋元帥などの神はやや個性に欠けており、そのために幾つかの資料で事跡をかなり恣意的に変えられていると思われる。またこれらの神の信仰は、民間では有力なものとはなりにくかったであろう。道教の儀礼においてその名がよく保存されている一方で、通俗文学の作品などにこれらの元帥がほとんど登場しないのは、こういった事情が反映しているものと推察される。

7. 玄壇趙公明の記事について

趙元帥、すなわち玄壇元帥趙公明は、現在でも財神として知らぬ者としてない神である。その黒い顔に、虎に乗って鉄鞭を構える姿は、各地の財神廟に祀られている。何度かふれたように、温・関・馬・趙の四大元帥の一角を占める⁸⁸⁾。

『三教搜神大全』の「趙元帥」の項に見える趙公明の伝は、およそ次のようなものである⁸⁹⁾。

元帥の姓は趙、諱は公明であり、終南山の人である。秦時の暴政を避けて山中にこもり、至道に修養を重ね、功が成ったため、玉皇上帝の勅旨により召され、神霄副帥に封じられた。按ずるに、元帥は皓廷霄度天、慧覚昏梵気の化生であり、その位は乾の位置にある。すなわち金水合気の象である。その服色の頭に鉄冠を戴き、手に鉄鞭を執るのは、金が水気を遘する様を表す。顔の色が黒く鬚鬚があるのは、北方の気を象徴する。虎に跨るのは、金の象である。これにより、水気の中に金があるの義を表す。体はすなわち道となり、用はすなわち法となる。法はすなわち雷霆にあらざればもってその威を表すことができない。泰華西台にその府があり、すなわち、元帥の主掌である。また元帥は「金輪」をもって称せらる。これらもまた西方金の象徴である。元帥は、上は天門の令を奉り、三界を策役し、五方を巡察し、九州を提点し、直殿大將軍、北極侍御史に任じられている。

昔、漢の天師張道陵が仙丹を修練していた時、龍神は玉帝に威猛なる神に守護を行うように奏上した。これにより、趙元帥は玉帝の勅旨を受けて、正一玄壇元帥の位を授けられた。「正」とはすなわち万の邪気が干渉せぬよう守る意味であり、「一」とはすなわち純一にして不二の職であり、甚だ重い職責であることを表す。

天師が飛昇して後、元帥は永らく龍虎の名山を鎮護することになった。そして今三元開壇伝度の時に、善をなし功を建て、過を悔いる人は、頑迷固陋な者であっても、皆元帥がこれを掌るのである。ゆえに龍虎の玄壇とは、実に賞罰の唯一の官署である。部下に八王猛将があるのは、八卦に依っている。六毒大神があるのは、天煞・地煞・年煞・月煞・日煞・時煞に依っている。五方雷神・五方猖兵は、五行に依っている。二十八将は、二十八宿に依っている。天和・地合の二将は、天門・地戸の闔闢を象徴している。また水火の二營将は、春に生じ、秋に煞することの往來を示す。これにより雷電を使役し、雨や風を呼び、瘟疫を払い、病や災いを無くすることができる

のである。趙元帥の功績は莫大であり、訴訟で冤罪となった者などは、元帥に祈れば公平なる裁きを得ることができ、商売を行って財を得ようとする者も、元帥はそのために利を図ってくれるであろう。ただ公平なる事であれば、元帥に祈れば、意のごとくならざるはない。

故に上天の玉帝は元帥に聖号を与え、高上神霄玉府大都督、五方之巡察使、九州社令都大提点、直殿大將軍、主領雷霆副元帥、北極侍御史、三界大都督、応元昭烈侯、掌士定命設帳使、二十八宿都総管、上清正一玄壇飛虎金輪執法趙元帥に封じたのである。⁹⁰⁾



『三教搜神大全』より玄壇趙元帥 鞭を執り虎に跨る

趙公明自体は、非常に来歴の古い神である。呂宗力氏らの指摘するように、六朝期の『搜神記』や『真誥』にすでにその名は見えている⁹¹⁾。その後は五名一組となった瘟神の一つとして知られている。『三教搜神大全』には、この瘟神についても「五瘟使者」として別に記録がある。それによれば、五瘟使者の名は以下の通りである⁹²⁾。

春瘟 張元伯
 夏瘟 劉元達
 秋瘟 趙公明
 冬瘟 鍾仕貴
 中瘟 史文業

趙元帥がこれらの瘟神から発展した神であることは間違いない。ただ、この瘟神としての趙公明と後の「趙元帥」とは、その性格において甚だ異なっており、「同名異神」と言えるほど違う性質を持つものとなっている。なお、これらの神は『武王伐紂平話』にも登場している。

なお先に見た雷部の張天君、すなわち張使者の名前は「張元伯」であったが、ここに見られる張元伯がその源流である可能性もある。また、これらの神の名の多くは恐らく、三国六朝期に活躍した人物の名前を変じて作られたものであると思われる。それは「鍾士季（鍾仕貴）」の名が、すなわち三国魏の武将である鍾会の姓と字そのままであることから窺える。太歳殷元帥である殷郊も、或いはその淵源は六朝晋代の殷浩であるかもしれない。とはいえ、これらについてはあくまで憶測の範囲を出ない。

趙公明については、現在最も人口に膾炙しているのは『封神演義』の故事である。すなわち『封神演義』においては、趙公明は峨眉山の道士で、截教に味方するため姜子牙と敵対し、強大無比な力で周側を圧倒するが、呪殺され、最後に「金龍如意正一玄壇真君」に封じられる⁹³⁾。この封号については『三教搜神大全』などに見える伝統的なものを踏襲しているが、趙公明の故事については全く改変されてしまっている。しかし『封神演義』が語り物や芝居などを通じて広まった結果、趙公明の由来と言えば完全にこれを指すことになっている。そのため、趙公明自体も殷周期の人物と見なされるに至っている。これは二郎神にしろ哪吒太子にしろ、『封神演義』に登場する多くの神格に共通する事態である。

さらに瘟神についても、『封神演義』では呂岳などを瘟神として封じてしまったために、この説が広まり、これにより趙公明はほとんど瘟神としては

意識されなくなった。

澤田瑞穂氏の指摘によれば、趙公明はインドのマハーカーラ神、すなわち大黒天の変じたものであると言う⁹⁴⁾。なるほどその招財の機能や、黒色という点など、大黒天と趙公明は多くの共通点がある。影響関係が存在する可能性は高い。ただ、哪吒や馬元帥と違って、『道法会元』などの資料にその直接の関係を窺わせる材料には乏しい。むしろ大黒天に近い性格を持つとすれば、黒煞神、すなわち翊聖真君の方が近いと思われる。

さて『三教搜神大全』「趙元帥」の項目は、明らかに『道法会元』巻二百三十二「正一玄壇趙元帥秘法」の「趙元帥録」をほぼそのまま引き写したものである。ただ、冒頭の部分は若干異なっている。

元帥の姓は趙、名は朗、一に名を昶、字を公明と。終南山の人である。秦の時に暴政を避けて山中にこもり、至道に修養を重ね、功が成ったため、玉皇上帝の勅旨により召され、神霄副帥に封じられた(略)。⁹⁵⁾

趙元帥の名を記した箇所のみが異なるが、あとは以下全く同文と言ってよい



趙元帥像（上海白雲觀蔵） 黒面に鞭を執る

文章が続く。恐らくこの文章は『道法会元』からの直接の引用ではなく、「趙元帥録」から、『道法会元』と、それに『三教搜神大全』の前身である『搜神広記』がそれぞれ別に引用したものであると推察される。

また『道法会元』卷二百三十六「正一龍虎玄壇大法序」にも、初代天師張道陵が丹を練っていた時に、それを守護した神が趙公明であったとの記載がある。『三教搜神大全』に見える「八王猛将」「二十八将」も、『道法会元』には詳しい記載がある。例えば八王猛将は、以下の八将である。

正一那吒王	吳宛	執鉄鎗
蛮雷尽命王	唐開	執鉄刀
持枷生殺王	譚超	執鉄叉
烜赫長生王	王賓	執鉄棒
掣電轟雷王	王雷	執鉄鎖
通天遍地王	龔狼	執鉄斧
江河淮濟王	張彪	執劍
翻魂尽命王	何魁	執戟

さらに「四方猛将」には、劉元達・張元伯・鍾士季・史文業といった瘟神であった頃からの人員が並び、そして二十八将は、後漢の光武帝の配下で有名な、鄧禹・呉漢などの二十八将となっている。しかしこれらの神は、後世の趙公明の故事においては全くと言ってよいほど関わってこないため、その存在自体がほとんど意識されなくなる。現在では趙公明の配下といえば、招宝天尊・蕭昇と納珍天尊・曹宝であると見なされている。これはむしろ、『封神演義』において結びつけられたもので、本来あまり意味は無い。

また、ここから明確になるのは、『搜神広記』と『三教搜神大全』との性格の差異である。

先に見たように、『三教搜神大全』の多くの元帥神の項目、雷部の諸天君、温元帥や馬元帥に関連する記事は、『道法会元』などの道教経典とはほとんど

ど共通性が無かった。元帥の名も違っていれば、事跡も全く異なるのが一般的であった。

しかるに『搜神広記』から引き継いだ項目、趙元帥や関元帥、それに玄天上帝などの記事については、明らかに『道法会元』或いは他の道教経典からの影響が見られる。すなわち、『搜神広記』が元代に編纂された時は、道教関連の資料を襲用することが多いのに対し、明代において『三教搜神大全』を増補した時は、ほとんど道教経典を使用しておらず、民間の資料ばかりを多用しているのである。これには、例えば「玄天上帝」の項目の場合、引用元である『玄帝実録』は早い時期に散逸し、このような経典は利用しにくかったなどの面もあろう⁹⁶⁾。このように、『搜神広記』と『三教搜神大全』では、その編集姿勢に大きな差異があることが、この趙元帥の記事からも推察されるのである。だから同じ元帥神の項目とはいえ、例えば「趙元帥」「義勇武安王」などと「孚祐温元帥」「靈官馬元帥」などでは、記事の性格が大きく異なっているのである。これは注意すべき事柄であろう。

8. 王靈官と薩真人の故事

王靈官は、非常によく知られた神である。今でも全真教の道観に行けば、必ず本殿の前方には「靈官殿」があって、王靈官が鞭を振り上げる姿を祀るのを見ることができるであろう。これはあたかも、仏寺の天王殿における四天王や韋馱天と同じ役割を担うものである。また、民間宗教においても、王靈官は「王恩主」として盛んな信仰を有している。

『三教搜神大全』の「王元帥」に見える王靈官の事跡は次の通りである⁹⁷⁾。

襄陽の洛里に、姓を王、名を悪、字を秉誠という者がいた。これが王元帥である。父の名は王臣、早くに亡くなった。母の邵氏は、遺腹である元帥を貞観丙申年七月庚申日申時に産んだ。元帥は幼くして孤であったが、読書はたしなまず、とにかく膂力があり、その性格は粗暴剛直で、曲がったことは受けつけなかった。市中に不平を抱く者があれば、行ってすぐにその憂いを分かち合った。また悪人

がいれば、これに制裁を加えた。そのため人々はその公明正大な態度には敬意を払っていたが、しかし同時にその武勇を憚っていた。ただ固く自分の見解にこだわり、人の曲直について容れることができなかつた。そのために王元帥に恩を感じて徳とする者がある一方で、これを仇敵視する者も後を絶たなかつた。(略)

元帥が荆襄の間に至ると、ある古廟が妖怪のために占領されていた。その妖怪は数里四方に靈験を顕し、毎年六月六日になると祭祀を要求し、牛・羊・豚を各々十頭、酒十瓶を用意させて、瘟疫を免れさせていた。ところがこの貢ぎ物が無いと、妖怪は瘟疫を起こし、ために人や動物が血を流して倒れた。この祭祀の費用を捻出するために、貧窮する者は子供を売るほどであり、その怨嗟の聲は一带に満ちていた。元帥はこのような妖怪の行いを怒り、廟や像を焼き尽くした。すると怪風が吹き荒れた。たまたま薩守堅真人が、薬によって瘟疫を救うために来ており、法術でもって怪風を鎮めて妖怪を退治し、この一带を安寧にさせた。(略)

玉帝は勅旨を下して元帥を豁洛王元帥に封じ、篆書で「赤心忠良」の四字がある金の印を賜り、天下の都社令を管理させる職とした。⁹⁸⁾



『三教搜神大全』より王靈官

この話は、王靈官の故事としてはそれなりにふさわしいものとなっている。生来剛直であった王悪という者が、仇をなす妖怪を薩真人と協力して退治したというものである。しかし実際には、この説話は甚だ作為的なものである。

王靈官と薩真人の話は、小説『呪棗記』などに見えるものの方が知られている。それによれば、薩真人と王靈官は共に北宋徽宗の頃の人であった。そして貢ぎ物を強要していたのは、他ならぬ王靈官であり、薩真人はその法力でもって廟を壊し、後にこれを服属させたのであると言われる。

不可解なことに、この話は『三教搜神大全』の「薩真人」の項目にも出ている。ある意味で互いに矛盾する話を載せていることになるが、これは様々な書物からの引用が中心である『三教搜神大全』の中ではありがちなことである。その薩真人の故事は次のようなものである⁹⁹⁾。

薩真人は、名を守堅といい、蜀の西河の人であった。若くして人を救い余に役立とうと思い、医学を学んだ。しかしある時誤って薬を間違えて人を殺めてしまったことから、医を捨てて、道に志した。薩守堅は江南の第三十代天師の張虚靖先生と、林靈素・王文卿の二侍宸が道法に優れているという話を聞いていたので、赴いて弟子となろうとした。陝西地方に出たところで、路銀が尽きた。そこへとある三名の道士が通りかかり、薩守堅にどこへ行くのか問うた。薩真人は張・林・王の三真人を訪ねるためであると、その理由を告げた。一人目の道士が答えて言う。

「先の張虚靖天師はすでに亡く、羽化登仙された。」

薩守堅は続いて王侍宸について問うた。

「王侍宸も羽化された。」

そして林靈素について尋ねると、「これもすでに亡くなった」と言う。

聴いて薩真人は残念がることしきり、みかねた道士が言う。

「今龍虎山におられる現在の天師の道法も高いとのこと。わしは今

の天師と知り合いであるがゆえ、手紙を書いてあげよう。これを持って訪ねるがよい。またわしはある道術が使えるので、これをそなたに伝授しよう。この道法を使えば、毎日自給できるぞ。」

そこで薩真人に呪藁の術を授けて言う。

「一つの藁を呪して出現させれば、七文の銭を得ることができる。一日に十藁を呪すれば、七十文の銭を得られる。これで一日の費用に充てることができよう。」

また別の道士が言う。

「わしもまた別の道術を授けよう。すなわちそれは雷法じゃ。」

薩真人がこの術を受けて用いてみると靈験があった。その後、一たび呪すと百あまりの藁を得たが、ただ七十文を得るだけで、余った銭は貧者を救うために分け与えた。

このようにして信州の龍虎山に至り、張天師に面会して道人から授けられた手紙を見せた。すると張天師の一族はみなそれを見て泣く。すなわちその書は虚靖天師の親筆であった。手紙に言う。

「われと王侍宸・林天師はこの薩君に遇い、各々一つの法術を伝授した。わが流派に加え、名を道録に載せるべきである。」

後に薩真人の法術はいよいよ靈験を顕すこととなった。(略)

薩真人は湘陰県の浮梁に来ると、そこでは童男童女を生け贄として廟の神を祀っていた。真人は言う。

「これは邪神である。すぐに焼かねばならぬ。」

言い終わると、雷火が空より起こり、廟はたちどころに灰となった。(略) その後薩真人が龍興府に至り、川べりで足を洗っていると、水の中に神の影が写った。四角い顔に黄色の巾、金の甲を着け、左手に袖をまくり、右手には鞭を執るという姿であった。薩真人は尋ねた。

「そなたはどのような神であるか。」

その神人は答えて言う。

「それがしは湘陰の廟神で王善という者であります。真人が我が廟

を焼かれてから、いままで十二年の間従っております。真人に過ちがあれば、それに乗じて仇を報ずるつもりでありましたが、真人の行いは正しく、そのような機会はありませんでした。真人の道行は高く、きっと天界の重要な役職に封じられましょう。できればそれがしを配下の将として玉皇上帝にご推挙いただけませぬか。」

真人は答える。

「そなたは兇悪な神であり、わが法にあっては、必ずやその法を損なうことになろう。」

王善は即座に真人に向かい、違背せぬよう固く誓う。薩真人は玉帝に奏上し、王善を収めて部将とした。この後、王靈官は薩真人が命ずると、響くがごとく応対した。¹⁰⁰⁾



『三教搜神大全』より薩真人 水中に控えるのが、鞭を持った王靈官

すなわち、人身御供を要求していた邪神とは、実は王靈官自身のことであった。「王元帥」の項目では、これが別の神のことに改められているわけである。

この「薩真人」の項目は、もともと『搜神広記』にあったものが、『三教

『三教搜神大全』『搜神記大全』に採録されている。すなわち『三教搜神大全』の記事としては「薩真人」が先に書かれ、「王元帥」の方が後で追加されたことは明らかである。

但し李豊楙氏の指摘によれば、この「薩真人」の項目には、それぞれの資料で微妙に書き換えがなされており、注意が必要である¹⁰¹⁾。例えば、薩真人が蜀の地を出て路銀が尽きた場所について、『搜神広記』では「峽」とし、『三教搜神大全』は「陝」とし、『搜神記大全』は「蜀中」とする¹⁰²⁾。

李豊楙氏によれば、この部分は『呪棗記』でまた改作がなされている。「峽」は峽口のこととされ、また訪ねようとした仙人も、「張虚靖・王方平・葛仙翁」になっている。しかし、張虚靖はともかく、王方平・葛仙翁の両名は薩真人からすれば、はるかに以前の人物であり、その弟子になろうというのはやや無理な感もある。李豊楙氏によれば、『呪棗記』の作者である鄧志謨は、特に神霄派について曖昧な知識しか持っておらず、それでこのような記載になったのであるとする。さらに、林靈素などについて世間は否定的な意見があることを顧慮したとする¹⁰³⁾。恐らくその通りであろう。

そもそも『呪棗記』の作者である鄧志謨は、その信仰心や小説執筆の意図とは裏腹に、道教史に対する理解が不十分であったようだ。例えば『三教搜神大全』にも見える、薩真人が張虚靖の手紙を龍虎山に持参する場面において、張天師に「これは父の親筆」と言わせている。しかし彼が当時参照できた資料を見たとしたら、公式的には三十一代の張天師は張虚靖の「子」ではないのが分かったはずである。このあたりに、鄧志謨の道教史に関する理解の浅さが露呈してしまっている¹⁰⁴⁾。

ところで、『三教搜神大全』が「峽」を「陝」に直してしまっているのは、李豊楙氏の指摘によれば、趙道一の『歴世真仙体道通鑑』¹⁰⁵⁾の記事を採用したためであるという。実際に、ここ的一段については、『三教搜神大全』と『歴世真仙体道通鑑』の文句が酷似している¹⁰⁶⁾。

ここで注意すべきは、『三教搜神大全』は『搜神広記』の配列や記事内容をほぼ踏襲していながら、一方では別の資料に拠って書き改めていることが多いということである。これは『搜神記大全』にも言えることで、特にこの

薩真人の記事は、三種の資料で微妙に差がある。

『続道蔵』に収録される『太上元陽上帝無始天尊説火車王靈官真經』¹⁰⁷⁾では、薩真人と王靈官の故事について、これを「唐朝」のことでであると記すなど、やや『三教搜神大全』「王元帥」に類似した記述が見える。恐らくこの時期には、王靈官について幾つかの異伝承があり、『三教搜神大全』はその一つについて、あまり資料間の矛盾を考慮せずに採録してしまったのであろう。

『道法会元』においては、卷二百四十一「雷霆三五火車靈官王元帥秘法」と卷二百四十二「豁落靈官秘法」、それに卷二百四十三「南極火雷靈官王元帥秘法」が王靈官に関連する法術となっている。いずれも、その主となっているのは薩真人であり、「祖師西河上宰汾陽救苦薩真人守堅」と書かれる。また王靈官の名は「王善」とであるとされる。

王靈官は、金の甲を着け、鞭を持つという姿で、これは現在の廟に見られるものとそう変わりはない。ただ、その副将としては、「陳元帥威・丘元帥先」の二元帥がある。

実はこの「丘・陳・王」という元帥の組み合わせは、『道法会元』卷百八十八の「太乙火府五雷大法」などの太乙火府系統の法術にも見えるものである。但し、その場合の名は「丘青・陳一言・王成之」となっており、これとは異なっている。とはいえ、同じく火部の神将を使役するこれらの法術には、何らかの影響関係があると推測できる。

さらに、『道法会元』卷百二十一「南宮火府烏暘雷師秘法」から始まる一連の「火府」に関する法術も関連性が深いと思われる。特に卷百二十二の「太上三五邵陽鉄面火車五雷大法」は、その名称からも、「雷霆三五火車靈官王元帥秘法」との類似が感じられる。但し、これらの法術に関連する神将は、「呉元帥明遠・宋元帥無忌・劉元帥炎真・劉元帥択先・楊元帥昌辛」などであり、また「辛天君忠義・閻不漸・謝仙火・張可烈・陳如常」などの神である。

これらの諸法術は、どれも一定の神体系を持つものであったと思われる。「陳元帥・丘元帥・宋元帥・劉元帥」の名は他の法術にもしばしば見えるし、

また「謝天君」もそれほどではないが、やはり一部の法術に名が見える。一方で、王靈官すなわち王善の名は、こういった法術ではあまり目にすることが無い。これは恐らく、王靈官の信仰がやや遅れて発展し、雷法の諸法中に取り込まれた時期が遅いということを示すものであろう。また李豊楙氏が言われるように、王靈官は温・関・馬・趙などの諸元帥と比べて、さらに後に道教の神将の列に加わった可能性が高い¹⁰⁸⁾。

そして「火部の神」というと、かえって王靈官、或いは馬元帥の方が知られるようになってしまったため、本来火部の神将としての地位があった陳元帥や丘元帥などの神が知られなくなったものと思われる。『道法会元』においては、これらの神将の事跡が併存する形で残されているが、これら元帥の信仰の興隆と衰微には、一定の時間差が存在するはずである。

もっとも、だからといって火部の各元帥の信仰が一様に衰えたわけではない。例えば、『三教搜神大全』には「謝天君」の項目があるし、また『搜神記大全』には「火精」として宋無忌の伝が見えている。「謝天君」についての記事は次の通りである¹⁰⁹⁾。

天君の姓は謝、名は仕栄、字は雷行といった。貞観年間の始め、一輪の火光が闕うがごとく、まっすぐに山東火焰山の中に進んでいった。謝恩がその父であり、韓がその母である。元帥はその性は苛烈にして、容貌は醜悪であったが、権力を持つ者に屈せず、法に峻厳であった。(略) 元帥は厳しい境遇に置かれるとますます雄弁となり、危機に陥るとますます功績をあげた。その忠心は確たるもので、天日にまで明らかであった。その功績は誠に玉帝の寵を受ける耳目の臣たるにふさわしい。そこで玉帝は元帥を火徳天君の職に封じ、金鞭を執り、火輪に乗り、頭に道冠を着け、もって亢陽の令を司らせた。¹¹⁰⁾



『三教搜神大全』より謝天君 火輪に乗る

話としてはほとんど特徴的なものはないが、火府の元帥としての謝天君の性格の一端は示されている。さらに呂宗力氏らの考察によれば、元來火の神として有名であったのは、むしろこの謝仙火の方であった¹¹¹⁾。

同じことは、宋元帥に対しても言え、火の精として知られていたのは、この神であった。もともとは、秦代の方士であったと思われる。すなわち『史記』の「封禪書」には、次のような記載がある¹¹²⁾。

齊の威王・宣王の時から、騶子の弟子たちは終始五徳の運に関する書物を著していた。秦の世になると齊の者たちがこれを奏上し、そのために始皇帝はこれを採用した。宋毋忌・正伯僑・充尚・羨門高・最後などはみな燕の出身で、方僊道を行った。¹¹³⁾

そして『索隱』はさらに次のような注を付ける¹¹⁴⁾。

『索隱』案ずるに、樂産は『老子戒經』を引いて云う、「月中仙人の宋無忌」と。『白沢図』に云う、「火の精を宋無忌という」と。けだ

しこの者は火仙であろう。¹¹⁵⁾

この注において、すでに宋無忌が火神としての性格を有していることが分かる。『搜神記大全』における宋無忌の記事は、次のようなものである¹¹⁶⁾。

神の姓は宋、名は無忌。漢時の人である。

生まれて神異あり、死してはすなわち火の精となる。唐の牛僧孺は廟を建ててこれを祭祀し、もって火災を防いだ。廟は武昌府の城の東七里にあった。(略)本朝で重建した廟は、俗に火星堂と呼ばれる。今、江東の各所で火星廟に祭神として祀られているのは、すなわちこの神である。¹¹⁷⁾

さらに、民間信仰側の資料として、宋無忌は『南遊記』において「火部元帥」として、華光を捉える役目で登場する¹¹⁸⁾。すなわち、火部の神将として民間にも知られていたわけである。

玉帝はその奏上を聴くと大変怒り、すぐに火部元帥の宋無忌を入朝させ、天兵三万を率い、速やかに中界に赴いて「華光を捉えよ」と命じた。宋無忌は勅旨を得て、直ちに南天の宝徳関を出て、天兵を集合させて隊伍を整え、中界に向かって出陣した。¹¹⁹⁾

これらの記載から考えるに、本来は謝天君・宋元帥などの方が火神としての伝統を古くより有するものと考えられる。ただ火の属性を持つ神は多く、祝融に始まり、火徳真君や炳靈公などもある。さらに馬元帥や王靈官などの神も増え、こういった多くの火神の中で、謝天君や宋元帥はやや影が薄くなっていたのかと推察される。

またさらに、王靈官と馬元帥は、その職種や形象において類似するところが多い。例えば共に三眼であること、火神であること、「靈官」と称されること、火輪に乗ること、などである。清代においては馬靈官の信仰もやや衰

えていき、現在ではもっぱら王靈官だけが知られることになった。

なお、安徽省九華山は地藏菩薩の聖地として知られるが、ここでは多くの寺院において、伽藍を守護する神として王靈官を配する。これが九華山における特有の現象なのか、或いはかつて寺院には普遍的に見られた現象であるのかは不明である。



王靈官像（安徽九華山地蔵禪寺蔵）

9. 清源妙道真君について

現在でも最も著名な神の一つである二郎神は、また「清源妙道真君」という号を持つ。二郎神の由来については、蜀の李冰であるとか、その次男であるとか、或いは『封神演義』の楊戩であるとか、様々な説がある。宋から明にかけては、二郎神はもっぱら趙昱という名であると認識されていた。むろん二郎神については、これまで幾つかの優れた研究があり、その発展についてはかなり究明されているので、ここではあくまで、『三教搜神大全』及び『道法会元』に見える記載を中心に考察したい¹²⁰⁾。

さて『三教搜神大全』の「清源妙道真君」の記事の内容は、だいたい次のようなものである¹²¹⁾。

清源妙道真君は、姓を趙、名を昱という。道士李珣に従って青城山に隠れた。隋の煬帝はその賢者であることを知り、嘉州太守とした。

郡の左には冷源二河があり、その領内の犍為に老蛟がいた。春夏になると水害を起こし、その水は一带に溢れ出し、民に被害を与えていた。趙昱は大いに怒り、時に五月の間、船七百艘ほどを用意し、兵千余人を率い、民万余人をもって、江を挟んで声をあげさせる。その声は天地を震わすほどであった。趙昱は刀を持って江の中に飛び込む。しばらくすると、江の水が赤くなった。崖の石が崩れ落ち、雷のような咆吼が鳴り響いた。趙昱は右手に刀を執り、左手に蛟の首を持って、波より躍り出た。時に趙昱を助けて水に入った者が七人いた。これがすなわち七聖である。趙昱がこのように蛟を退治した時、まさに年二十六歳であった。

隋末に天下は大いに乱れ、趙昱は官位を捨てて隠居した。その後は終わるところを知らず。後に嘉州の江の水が溢れた時、蜀の者たちは青い霧の中に、白馬に乗り、数人を引き連れて鷹犬と弾弓を携えて獵をする者が、波間の上を通り過ぎるのを見た。すなわち趙昱であった。民はその徳に感じ入り、廟を灌江口に建てて奉祀することになった。俗に「灌口二郎」という。

唐の太宗はこれを「神勇大將軍」に封じた。唐の玄宗が蜀に行ったとき、「赤城王」に封じた。宋の真宗朝となり、益州に大乱が発生すると、真宗皇帝は張乖崖を蜀に派遣してこれを治めた。張乖崖は二郎神の廟に詣でて、神助を求めたところ、果たしてそのためによく克つことができた。そのため朝廷に奏上し、追尊してその聖号を「清源妙道真君」とした。¹²²⁾



『三教搜神大全』より清源妙道真君 二眼であり鬢がある

この記事は、『搜神広記』と『搜神記大全』にも見えている。但し、『搜神記大全』の方は目録においても本文においても、これを「灌口二郎神」とする。二郎神を趙昱、すなわち趙二郎とするのは、元明の雑劇によく見られる。例えば『二郎神鎖齊天大聖』¹²³⁾ 雑劇では、二郎神が次のように自称する。

われは二郎真君これなり。

俗姓は趙、名は昱。幼くして道士李班に従い、青城山に隠れた。隋の煬帝の時、煬帝はわれの大賢なるを知り、嘉州太守とした。郡には左に冷源二河があり、そこに健蛟が住みついており、春夏と害をなした。われは刀を持って水に入り、蛟を斬って躍り出た。後に官位を棄てて道に学び、白日昇天した。そして「清源妙道真君」の号を加封された。¹²⁴⁾

ほとんどこの故事は、『三教搜神大全』の記述と一致する。またこの故事自体を劇とした『灌口二郎斬健蛟』¹²⁵⁾ も存在する。『二郎神醉射鎖魔鏡』¹²⁶⁾ 雑劇においても、二郎神は趙昱と名のり、またほぼ同じような話を述べる。

少なくとも元から明の間にかけては、二郎神は趙昱、或いは趙煜という名であり、また蛟を斬った故事を有し、さらに七聖という部下があったということが広く知られていたものと思われる。『三教搜神大全』の記事は、まさにこの事情を反映したものであろう。

しかし明末になると、『西遊記』に見られるような「楊二郎」、或いは『封神演義』の「楊戩」といった伝承が強くなり、二郎神の姓は楊であると見なされるようになる。「清源妙道真君」の号も、楊二郎に伴うものとされてしまう。

ところで『搜神広記』及び『三教搜神大全』においては、「義勇武安王」の次が「清源妙道真君」、すなわち関羽のすぐ後に二郎神が配されている。これは単なる偶然とは思えない。

『道法会元』においては、二郎神は関羽と共に登場することが多い。例えば『道法会元』二百五十九「地祇馘魔関元帥秘法」の「天師斬蛟」の符には、次のような文章が見える。

右の符は、清源妙道真君陳昱、崇寧真君関羽、禁将趙旻・関平などの神将を派遣し、急ぎその役に用いるためのものである。¹²⁷⁾

もっとも、ここでは「清源妙道真君」は、陳昱という名になっている。別に「禁将」趙旻という名も見える。さらに、卷二百六十「酆都朗靈関元帥秘法」では以下のような記載がある。

主法
 祖師三十六天師 虚靖張真君
 将班
 主将酆都朗靈馘魔大将 関元帥諱羽
 副将清源真君 趙旻

すなわち、酆都系の法術においては、清源妙道真君は関元帥の副将として

扱われていたのである。このように『搜神広記』において、関羽の後にすぐ二郎神が配されていることは、両者の密接な関係を物語るものと言えよう。

とはいえ、ここの「清源妙道真君」は恐らく趙昱とは関係があると推察されるものの、イコール二郎神を指すかどうかまでは断言できない。「趙昱」という名を分断して二つの神格にしたのか、或いは「趙旻」と「陳昱」を合わせて「趙昱」としたのかは判然としないが、『道法会元』の記載が、時に『搜神広記』よりも古い伝承を反映していることが多いことからすると、始めに「趙旻」「陳昱」の二神将があり、後に「趙昱」となったものか。

10. 呉客三真君と祠山張大帝

『搜神広記』『三教搜神大全』に見える神々には、後に信仰が衰えていき、明代の通俗文学などにおいて、やや影が薄くなったものが幾つかある。ここではその中で、『道法会元』にも名に見える葛・唐・周の三將軍と祠山張大帝などについて若干の考察をする。

さて『三教搜神大全』の巻二に収録される「呉客三真君」とは、すなわち葛・唐・周三將軍のことである¹²⁸⁾。



『三教搜神大全』より呉客三真君 すなわち唐・葛・周三將軍

昔、周の厲王には三名の諫官があった。これが唐・葛・周の三官である。(略) 三官は諫めて言う。

「先王は仁義をもって国を守り、道徳をもって民を教化しました。」
(略)

このようにしばしば諫めたにもかかわらず、厲王は全く聞き入れない。そこで三官は職を棄て、南の呉の地へと向かった、呉王は彼らを迎えて大いに悦んだ。(略) 後に厲王が薨じ、宣王が即位したと聞いて、三官は周国に戻った。(略) 三官は功績により、封号を与えられることになった。

すなわち、唐宏、字文明は孚靈侯となり、葛雍、字文度は威靈侯となり、周斌、字文剛は浹靈侯となった。宋の大中祥符元年(一〇〇八)、真宗は泰山に封禪の儀を行った。泰山の天門に至ると、そこに三名の仙人が空より下ってきた。真宗皇帝が恭しくこれに問うたところ、三仙は、「天命を奉じて玉駕を護衛しております」と答えた。

真宗は彼ら三名を、それぞれ「上元道化真君・中元護正真君・下元定志真君」に封じた。¹²⁹⁾

すなわちこれによれば、「呉に客となった」から「呉客」と称していると考えられる。

先に見たように、この三將軍については、『道法会元』をはじめとする多くの道教經典に記載がある。例えば、『道法会元』卷百八十一「上清五元玉冊九靈飛歩章奏秘法」には、天門を守護する三將軍として、上元將軍唐宏・中元將軍葛雍・下元將軍周武の名が見えている。金允中の『上清靈宝大法』¹³⁰⁾には、北極四聖など一部を除いて、元帥神に関する記載がほとんど無い一方で、この「三元唐葛周三將軍」については記載がある。恐らく道教の神將としては、他の元帥神よりも来歴の古いものであり、オーソドックスな神將であると言える。

しかし呂宗力氏らの指摘によれば、この三將軍は、宋代において既にその

名は不明となっており、僅かに姓のみが知られるだけであった。そして元明の間に、周の厲王の臣下であるとの伝承が附会されたとする¹³¹⁾。むろん『三教搜神大全』のこの記事は『搜神広記』を引き継いだだけのものであるから、その元代の故事が反映されているものと考えられる。また三將軍は数多くの廟宇があったとされるが、後の通俗文学などの作品にはほとんど登場しない。

なお、唐・葛・周三將軍は、現在ではむしろ儺戯において祭神とされるのが目立つ。廣田律子氏の指摘によれば、江西省萍郷市における追儺神の神体として、三將軍の仮面が祀られている¹³²⁾。

祠山張大帝も、著名な神であるものの、元明の通俗文学にはあまりその姿は見えないものである。ただ『三教搜神大全』に記事がある他、『道法会元』にも記載がある。『三教搜神大全』の「祠山張大帝」の故事は次のようなものである¹³³⁾。

祠山聖烈真君は、姓を張、名を渤、字を伯奇といい、武陵龍陽の人であった。父を龍陽君といい、母を張媪といった。その父の龍陽君と張媪が太湖の陂に遊んだ時、昼であるにもかかわらず日が見えなくなり、風雨が起こつて闇となり、雲が上を覆った。また五つの瑞祥の青雲がわき、雷が鳴り響いた。そんな中、張媪の所在が不明となった。しばらくして空が晴れると、張媪の前に天女が現れて言う。「われは汝の祖である。そなたに金丹を授けよう。」

その金丹を服すると、すでに妊娠していた。懐胎すること十四ヶ月、漢の神雀三年二月十一日夜半に張渤を生んだ。張渤は長じて雄偉な貌であり、寛仁大度にして、感情を表に出すことが少なかった。身長は七尺で、鼻が高く美髯あり、髪を垂らせば地に届いた。そして水火の術に通曉していた。ある時、張渤に向かって神が現れ、「この地は荒僻にして、家を建てるところではない。他の場所に行くように」と命じた。

時に神獸が前を導いたが、その形は白馬のようで、その声は牛のようであった。張渤は夫人李氏と共に東のかた呉の会稽に遊び、浙江を渡り、苕雲の白鶴山に至った。山には四つの河が流れ、その流れは山の下で会した。張渤公はそこに居住することにした。(略)

唐の天宝年間に、祈雨において靈驗があり、始めて水部員外郎に任ぜられた。また「横山」を改めて「祠山」とした。唐の昭宗は司農少卿の位を贈り、金紫を賜った。唐の景宗は「広徳侯」に封じた。南唐においては、司徒とされ、「広徳公」に封じられた。後晋では「広徳王」とされた。宋の仁宗は「靈濟王」に封じた。寧宗の代に至り、号を加えて八字の王とした。理宗の淳祐五年（一二四五）、改封して「正佑聖烈真君」とした。咸淳二年（一二六六）十二月十二日に至り、加封せられて「正佑聖烈昭徳昌福真君」となった。¹³⁴⁾



『三教搜神大全』より祠山張大帝

この説話自体にはほとんど特色が無いし、かなり作為的なものが感じられる。まず張大帝の生まれた「神雀」という年号は漢の時代には無い。もっと

も、『史記』の「曆書」には、「神雀」の年号があるが、これとの関連は薄いものと思われる。また張渤の姿は、『三国志平話』に見える劉備の容姿の形容と酷似する¹³⁵⁾。呂宗力氏らの考察によれば、張大帝の号の一つに「昭烈大帝」があることから¹³⁶⁾、「昭烈帝」劉備との混同があるものか。

その号に祠山とあることから、恐らくこの神は安徽の祠山一帯の地方神であったと考えられる。その性格は水神であったようで、二郎神と似た面がある。宋代にはかなり信仰が盛んであり、明代においても、関帝や華光と並び称せられたほどであった¹³⁷⁾。その信仰は特に江蘇・安徽一帯で著しかった。

その信仰を反映してか、『道法会元』にはこの張大帝を中心とした法術が採録されている。すなわち巻百三十の「北真水部飛火擊雷大法」と巻百三十一の「石匣水府起風雲致雨法」では、その法術の中心的な存在として張大帝が充てられている。特に「石匣水府起風雲致雨法」では、祈雨の法術であり、その神将として張大帝と配下の神が重視されていることが分かる。

帥将

祠山正佑聖烈真君 張渤

左衛大將軍 丁聖者曠

右衛大將軍 壬聖者游

先鋒報応大將軍 方通

張大帝は眷属が多く、『三教搜神大全』には、夫人李氏・九弟・五子・八孫の封号についていちいち記載があるが、最後に「佐神丁壬二聖者・打拱方便者」¹³⁸⁾の名が見える。すなわちこれが『道法会元』に見える「丁聖者・壬聖者・方便者」と対応しており、これらが張大帝の配下として広く知られていたことが判明する。

『道法会元』においては、張大帝は完全に水部の神として、玄天上帝の下に位置せられている。とはいえ、後の『北遊記』などの玄天上帝に関係する文献にはあまりその姿が見えない。これに限らず通俗文学においては、総じて張大帝の影は薄い。

なお、日本の禅宗寺院においては張大帝を伽藍神として祀る¹³⁹⁾。例えば鎌倉建長寺や、京都泉涌寺においてである。これはつまり、日本に禅宗が流入した時代に張大帝の信仰が盛んであり、伽藍神としてそのまま輸入したことを示すものであろう。

張大帝と同じく日本で伽藍の神とされるものに招宝七郎がある。これはまた大権修利菩薩とも称せられる。臨濟宗及び曹洞宗の寺院で伽藍神として祀られるものである¹⁴⁰⁾。京都の相国寺などでは、法堂の右側にこの大権修利を祀る。現在の寧波市の東に招宝山があるが、ここを中心として浙江一帯で特に海神として盛んに信仰された神である。浙江の阿育王寺などでは仏舎利の守護神として祭祀されている。この神の姿は片手を上に差し上げて、遠望の勢を為すのが特徴的である。



大権修利招宝七郎（京都・相国寺法堂蔵）

『水滸伝』の第七十回に、没羽箭の張清という豪傑が石つぶてを投げる時に、「招宝七郎のような」動作を行ったという記載がある¹⁴¹⁾。これについて『水滸伝』では何の説明も加えないが、すなわち七郎神の片手を差し上げるポーズのことを指しているのだと思われる。つまり、『水滸伝』の読者は何の説明も無しにこのポーズがどんなものであったかを理解したと解さねばな

らない。恐らく、この当時『水滸伝』が流行していた地区では、誰もが「招宝七郎」と聞けば直ちにその姿が想起できたのであろう。この時期、招宝七郎という神格が相当広く知られていたことが、これによって分かる。なお先にも少しふれた通り、『西遊記雑劇』においては「迴來大権修利」が第十の保官として見える¹⁴²⁾。すなわち招宝七郎は張大帝と同様に、かつては南中国においては盛大な信仰を有していたのであり、また両者ともに仏教信仰と深い関わりがあったものと推察されるのである。

11. 天妃に関する記事の特色

『三教搜神大全』の中でも、特異な地位を占めるのは、「天妃娘娘」、すなわち媽祖の記事である。これは元帥神ではないが、元帥神の発展とも近い状況があり、ここで少しふれておきたい。

媽祖については、これまでも数多くの研究があり¹⁴³⁾、特にこの『三教搜神大全』の項目については、李猷璋氏による詳細な検討があるが、ここではそれを踏まえた上で幾つかの問題を検討することとする¹⁴⁴⁾。その「天妃娘娘」の記事の内容は、次の通りである¹⁴⁵⁾。

天妃の姓は林といい、もとは興化路寧海鎮に生まれた。すなわちその地は、莆田県の治八十里の浜で湄州の地である。母陳氏は、かつて夢に南海観音に優鉢花を与えられ、これを飲むと、すでに懐胎していた。(略)唐天宝元年(七四二)三月二十三日に誕生した。誕生の日には、異香が付近にただよい、十日を経ても香りが残っていた。(略)

天妃は五歳にして能く観音経を読んだ。(略)笄の年になっても、決して嫁がぬと誓う。父母も無理に他に嫁がそうとはしなかった。そのまま居ることいくばくもなく、儼然として端座したまま逝去した。(略)明の世祖永楽皇帝の七年(一四〇九)に、中貴人の鄭和が西南夷に向けて出航した際、天妃の廟において安全を祈祷した。(略)遂に勅封して「護国庇民妙靈昭応弘仁普濟天妃」とした。¹⁴⁶⁾



『三教搜神大全』より天妃娘娘

媽祖の出生や事跡については、資料によって異なる伝承を採録している。しかし、李獻璋氏の指摘によれば、この『三教搜神大全』の「天妃娘娘」の記載は、ほとんどそれまでの所伝と関連の無いもので、かなり恣意的に組み立てられたものであると言う¹⁴⁷⁾。

実際、媽祖の生きていた時代は、多くの資料が五代・宋とするのに対し、この『三教搜神大全』の記事のみは、古く唐の天宝年間とする。また母が観音菩薩から優鉢花を与えられ、これを懐胎したとするなど、確かに作為的な記述が目立つ¹⁴⁸⁾。

さて、先に見たとおり『三教搜神大全』はその多くの記事を、『搜神広記』から襲用している。そのため当然ながら、両者で共通する記事は多い。

一方で、『搜神記大全』も『搜神広記』から大半の記事をそのまま受け継いでいる。だから、『搜神広記』『三教搜神大全』『搜神記大全』の三者ではかなりの記事が一致する。

しかしさらに『搜神広記』に見えないにもかかわらず、『三教搜神大全』と『搜神記大全』に共通するという記事が幾つか存在する。これは『三教搜神大全』と『搜神記大全』が、『搜神広記』の後に発展した別の「搜神」類

書を共通の祖本としているためであるのは間違いない。ただ問題は、『三教搜神大全』と『搜神記大全』の両者に項目がありながら、中身の文章がかなり異なる記事が一部で存在するということである。例えば、「五方之神」などの項目は、両者が共に内容がほぼ一致するので、恐らくはその基づいた祖本が、元来その記事を有していたのだと分かる。しかし、例えば「観音菩薩」や「天妃娘娘」といった項目では、『三教搜神大全』と『搜神記大全』とでかなりその内容が異なっている。

『搜神記大全』の「天妃」の項目は、次のようなものである¹⁴⁹⁾。

天妃は莆の人であり、宋の都巡檢林愿の娘であった。生れながらにして神靈であり、よく人の吉兆を言い当てることができた。その没後に郷里の人間が廟を湄州之嶼に建てた。(略) 歴代累封して天妃の位に至った。¹⁵⁰⁾

この『搜神記大全』の記事は、『三教搜神大全』の記事に比べて非常に短く、簡略なものである。しかもその内容はほとんど一致しない。甚だしくは媽祖の生誕の年代すら異なる。

李猷璋氏の指摘によれば、この『搜神記大全』の方の記事は、地方志に載っている媽祖の伝承の外に出るものではなく、そういった意味では非常にオーソドックスなものと考えてもよいであろう¹⁵¹⁾。

『三教搜神大全』の方は、また鄭和についての記事を入れているのが特色である。さらにこの文の末尾には、この記事自体が費鼯采の碑記を取り込んで記したものであることが書かれている。李猷璋氏によれば、その碑文は万曆二十六年(一五九八)に書かれたものであり、しかも万曆三十年(一六〇二)に著された『天妃娘娘媽伝』との影響が考えられるという¹⁵²⁾。そこまで断言できるかどうかはともかくとして、『搜神記大全』における羅懋登の序文が万曆二十一年(一五九三)に書かれていることを勘案すると、『三教搜神大全』の方が『搜神記大全』よりやや遅く現れ、天妃媽祖に関する記述も大幅に書き改められたと考えることは十分に可能であろう。

ところで『天妃娘媽伝』は、また『天妃林娘娘伝』とも呼ばれ、三十二回の長さを持つ通俗小説である。確かに、この小説には、冒頭に観音菩薩が登場したり、媽祖が元神を出して難破する船を救ったという話が載せられていたり、『三教搜神大全』の記事と共通する面がある¹⁵³⁾。先に見た馬元帥や殷元帥の項目がそうであったように、『三教搜神大全』には、民間の通俗文芸で発達した説話と関連性の深いものがよく見られる。恐らく、この「天妃娘娘」の部分においてもそういった性格が出ているものであろう。そしてその性格は、『搜神記大全』とは異なるものである。むしろ『搜神記大全』も、民間信仰の実情をよく反映するものであるが、その記事の基づくところは、やはり史書や経典など、ややオーソドックスな文献である。

「天妃娘娘」と似たようなパターンは、『三教搜神大全』の「大奶夫人」¹⁵⁴⁾にも見られる。この項目は『搜神記大全』においては「順懿夫人」¹⁵⁵⁾となっている。すなわち現在では臨水陳夫人、或いは三奶夫人の一として知られる神である¹⁵⁶⁾。これも、「順懿夫人」の項目が非常に短く、かつ無味乾燥な記述なのに対し、「大奶夫人」の方は複雑で、かなり長い記事となっている。また李献璋氏によれば、この「大奶夫人」の記載も『三教搜神大全』の記事の他に見られぬものであると言う¹⁵⁷⁾。

『三教搜神大全』で、「天妃娘娘」「大奶夫人」の二神、すなわち福建で盛んな信仰があった媽祖と臨水夫人の項目だけが、異様とも言えるほど内容を書き換えられているのは、何かしらの理由があると思われる。『三教搜神大全』の書かれた地域について、李献璋氏は「五両」の語に注目して、次のように言う¹⁵⁸⁾。

天妃娘娘の説話に「五両」が出ているのは、記事の書かれた地域が鉛山の付近を起点とする錢塘江と、長江の鄱陽湖から下流との間であったことを暗示するとしなければならぬ。

ただ、この語をもってのみ断定できるかどうかは不明である。李氏はまた『三教搜神大全』の「九鯉湖仙」¹⁵⁹⁾の項目に手が加えられていることを指摘

するが、この神も福建の神である。これからすれば、むしろ『三教搜神大全』の編者は福建と関わりの深い人物で、それ故に「九鯉湖仙」「天妃娘娘」「大奶夫人」という、福建地方の三神の項目については、特別に注意を払って項目を書き換えたのではあるまいか。或いは『三教搜神大全』の福建版だけに改変がなされた可能性もある。

12. その他の元帥神について

ここでは『三教搜神大全』に記事があるものの、これまでに検討しなかった幾つかの元帥神についてまとめて見てみたい。

李元帥については、『三教搜神大全』の「李元帥」¹⁶⁰⁾ではこれを海神とする。その名は李封といい、南海の海賊であったとされる。この伝承の基づくところは不明であり、また『道法会元』などの経典においても、姓が李である神将は数多く存在するため、その比定が難しい。敢えて憶測すれば、卷百三十の「北真水部飛火擊雷大法」にみえる「水部驅龍大神・李順」が近いのか。

『三教搜神大全』の「王高二元帥」¹⁶¹⁾に見える王鉄・高銅の二元帥は、伝によれば戦国期に韓王に使えた者であるという。『道法会元』などには姓を王とする神将は甚だ多いが、この王・高二元帥に相当する者がどれに該当するかは分からない。

田呂元帥は、『三教搜神大全』「田呂元帥」¹⁶²⁾の項目にその伝が見える。蒼龍の子であるとされ、雷部の神としての性格が強い。姓が田であるのか、呂であるのか、やや不明確であるが、恐らく呂とすべきであろう。『道法会元』では、卷百二十五の「九州社令蛮雷大法」の一連の「九州社令」系統で中心となる神将に康・劉・呂の三元帥がある。この「九州社令擊剥使者呂魁」が該当するか。或いは、卷四十に見える「呂・丘・田・何・盧・路諸大功曹」のうち、田・呂の両使者の名が混じたものか。

党元帥は、『三教搜神大全』「党元帥」¹⁶³⁾に事跡が見える。名は党藉。この神は「元祐丁未」に生まれたとする。北宋元祐年間と思われるが、該当する年次は無し。また記事には、「晋の昭察使に任ぜられ」という記載もある

が、すると後晋代となるか。この神もその典拠がやや見いだしにくい。

『三教搜神大全』の「副応元帥」¹⁶⁴⁾については、姓は副とする。「乾符九年」に生まれたとするが、唐の乾符年間は六年で終わる。また「壬寅年」とするが、それも該当するものが無い。恐らく党元帥の記事同様、年代については怪しいものである。

高元帥については、これはむしろ医薬の神であるとする。『三教搜神大全』の「高元帥」¹⁶⁵⁾の記事によれば、元帥は姓を高、名を員といい、「薬師天尊」の徒弟であったという。この神については、現在の道教儀礼書にも「監生高元帥」¹⁶⁶⁾とあり、有力な元帥神の一つであるとは言えよう。また『道法会元』の中には高姓の元帥は多い。

朱元帥については、『三教搜神大全』「朱元帥」¹⁶⁷⁾では、名を朱彦矢といい、下界で悪事を行っていたのが、玄天上帝や謝天君に退治され、その後「不信道法」の者を処罰するよう、元帥に封じられたとの故事を載せる。この朱元帥は、すなわち『道法会元』の卷百五十四と百五十五の「混元六天妙道一炁如意大法」に記載のある「雷府管打不信道法大將軍・朱彦明」のことであろう。他の法術においても、朱將軍の名はたびたび見える。蘇州玄妙觀の雷部十二天君の一人でもあり、雷部ではかなり有力な神とされる。

ただいずれにせよ、『三教搜神大全』における各元帥の形象や故事は、道教側の資料に見られるものとは相違しており、恐らく民間において発展したか、或いは別に作為せられたものであると考えられる。

なお、これらの元帥神のほとんどは、『北遊記』にも登場している。それは『北遊記』がこの『三教搜神大全』に基づいて小説を構成したことを示すものと思われる。しかし一方で、『三教搜神大全』と『北遊記』で、かなり故事の内容が変わっているものも存在する。例えば、高元帥は『北遊記』では北極紫微大帝の化身ということになっている。そういった改変は、『北遊記』の作者である余象斗によってなされたものか、民間にそのような説話があったのを取り入れたものかは判然としない。ただ、『三教搜神大全』と『北遊記』の刊行期は近いと思われ、余象斗の作為によるものと見なした方が妥当であろう。

13. 儼戲と元帥神

現在も中国の各地で行われている儼戲において、元帥神は様々な役割で登場している。

『福建寿寧四平傀儡戲華光伝』¹⁶⁸⁾には、福建地方の傀儡戲で演じられる「華光伝」が載せられている。これ自体は小説『南遊記』に基づくものである。ただ、衰えたはずの華光信仰が根強く残っていることの証左となる資料である。この劇には、また哪吒や楊二郎、温元帥・趙元帥・康元帥・韓元帥などの諸元帥が登場する。韓元帥が登場するのは、『南遊記』の影響を受けたもので、恐らくこの神の信仰が元からあったことを示すものではないと推察される。

『湖南省黔陽県湾溪郷の観音醮和辰河木偶戲香山』¹⁶⁹⁾は、湖南における「観音醮」と呼ばれる儀礼についての報告である。ここで祭祀の中心になるのは観音菩薩であるが、民間祭祀にふさわしく、多くの道仏の神が混在している。「三界牒」でふれられる神は、五嶽・諸菩薩といった神仏であるが、その中に「王・馬・殷・趙四大元帥」という元帥がある。すなわち、王靈官・馬元帥・殷元帥に趙元帥である。また「開壇」では王靈官が現れて中心的な役割を果たす。

『江西省南豊県三溪郷石郵村の飛儼』¹⁷⁰⁾は、江西省の儼戲についての報告である。ここに登場する神々も、儒仏道が混在したもので、夥しい数があるが、その中には「雷部打邪朱元帥・地司太歳殷將軍・正一靈官馬元帥・主将玄壇趙將軍」があり、朱・殷・馬・趙の四元帥の名が見えている。

『広西省環江県毛南族的還願儀式』¹⁷¹⁾においては、広西省の毛南族の儼戲が紹介されているが、ここで登場する神将は、唐・葛・周の三將軍である。

『接龍喪戲』¹⁷²⁾には、四川において行われる道仏混淆の度合いが強い葬送儀礼について報告があるが、そこに登場する元帥神は「恩将玄壇趙元帥・五安法主関元帥・押瘟上将温元帥・地祇上将殷元帥・雷門飛天張使者・大法風火田元帥」である。ここでは関羽を元帥神として扱う。

『江蘇省通州市横港郷北店村胡氏上童子儀式』¹⁷³⁾では、巫医の行う儼についての報告があるが、「靈官会」や「元帥会」が儀式の一つとしてあった。

またその儺において言及される元帥神は、鄧天君・辛天君・張天君・劉天君・陶天君・王天君・馬天君・殷天君・鉄天君・朱天君・高天君・趙天君・温天君・周天君・関天君・陳天君・邱天君・鍾天君・白天君といったものである。ここではなお、陳・邱といった元帥の名が残されている。

『胥河兩岸的跳五猖』¹⁷⁴⁾ は安徽省と江蘇省の界に当たる地区の儀礼の報告である。この儀礼は、祠山張大帝を主とするものである。儀礼には、王靈官と馬元帥が登場する。張大帝は、この地域においてはいまでも強い信仰があると推察される。

『四川省江北県舒家郷上新村陶宅的漢族祭財神儀式』¹⁷⁵⁾ の報告によれば、財神すなわち趙公明元帥を主神として祭祀が行われる。

田仲一成氏が『中国巫系演劇研究』¹⁷⁶⁾ において指摘する所によれば、江西萍郷県では唐・葛・周三將軍・哪吒太子・関帝・趙公明などの神が儺戯に登場し、安徽貴池県では馬・趙・温・岳の四大元帥が登場する。これらの南方の儺戯が、三將軍などの古い枠組みをよく保存するのに対し、例えば北方の山西曲沃県の儺礼では、明らかに『封神演義』の影響を受けた神体系となっている。

このように、中国各地で行われている儀礼や儺戯において、元帥神は主要とは言えないまでも、重要な役割を果たす神格であることが多い。しかし、これらの各地方における儀式については、古い層を残すものがある一方で、清代の『封神演義』関連劇が発展した後の影響を明らかに蒙っているものもあり、簡単には論じられない。

注

- 1) 『玄天上帝啓聖録』（『正統道蔵』洞神部S. N. 958）
- 2) これについては、拙稿「玄天上帝の変容——数種の經典間の相互関係をめぐって——」（『東方宗教』第91号・1998年）60～77頁参照。
- 3) 例えば、黄華節『関公の人格と神格』（台湾商務印書館・1967年）、蔡東洲・文廷海『関羽崇拜研究』（巴蜀書社・2001年）、李福清（B. Riftin）『関公伝説と三国演義』（漢忠文化事業公司・1997年）、洪淑荅『関公民間造型之研究』（台湾大学出版委員会・

- 1995年)、顔清洋『関公全伝』(台湾学生書局・2002年)、盧暁衡主編『関羽・関公和関聖』(社会科学文献出版社・2002年)などがあり、様々な角度から総合的に論じられている。
- 4) 『絵図三教源流搜神大全(外二種)』(上海古籍出版社・1990年)109頁。
 - 5) 原文：義勇武安王、姓関、名羽、字雲長。蒲州解良人也。当漢末、与涿郡張飛、佐劉先主起義兵。後於南陽臥龍岡三謁茅廬、聘諸葛孔明。宰割山河、三分天下、国号为蜀。先主命関公為荊州牧、不幸呂蒙設計、公乃不屈節而亡。追贈大將軍、葬於玉泉山。士人感其德義、歲時奉祀焉。
 - 6) 前掲『絵図三教源流搜神大全』109~111頁。
 - 7) 原文：至祥符七年、解州刺史表奏云、塩池自古生塩、收辦宣課。自去歲以来、塩池減水、有虧課程。此係灾变、敢不奏聞。(略)帝遣呂夷簡持詔就塩池禱之。是夜夢一神人戎服金甲、持劍怒而言曰、吾乃蚩尤神也。奉上帝命、王此塩池。(略)今朝廷崇以軒轅、立廟於天下、吾乃一世之仇也。此上不平、故竭塩池水。(略)王欽若奏曰、蚩尤、乃邪神也。陛下可遣使就信州龍虎山詔張天師、可収伏此怪。帝從之、乃遣使詔天師至闕下。(略)天師奏曰、臣举一将最英勇者、蜀関將軍也。臣当召之、可討蚩尤、必成其功。言訖、師召関將軍至矣、現形于帝前。(略)如此五日、方且雲収霧散、天晴日朗、塩池水如故。皆関將軍力也。(略)賜廟額義勇、追封四字王、号曰武安王。宋徽宗加封尊号曰、崇寧至道真君。
 - 8) 陶弘景『洞玄靈宝真靈位業図』(『正統道藏』洞真部S. N. 167)
 - 9) これについては、前掲顔清洋『関公全伝』126~142頁、また242~255頁を参照。
 - 10) 『宋元平話集』(上海古籍出版社・1990年)282頁。
 - 11) 原文：昔三十代天師、虚靖真君於崇寧年間奉詔旨云、万里召卿、因塩池被蛟作孽、卿能与朕因之乎。於是、真君即篆符文行香、至東嶽廊下、見関羽像、問左右。此是何神。弟子答曰、是漢将関羽、此神忠義之神。(略)即時風雲四起、雷電交轟、斬蛟首於池上。
 - 12) 『孤本元明雜劇』(台湾商務印書館・1977年)第八冊。
 - 13) 原文：貧道姓張、名乾耀、道号澄素。我祖伝道法、戒律精嚴、三十二代、輩輩留伝。
 - 14) 原文：大人、這一位神将、姓関名羽、字雲長。今為玉泉山都土地。則他便破的蚩尤。
 - 15) これについては、李玫「明代産生及流行的関羽戲的特点」(前掲『関羽・関公和関聖』所収)227~229頁、及び前掲蔡東洲・文廷海『関羽崇拜研究』77~79頁参照。
 - 16) 沈德符『万曆野獲編』(文化芸術出版社・1998年)390頁。

- 17) 原文：至宋大中祥符之甲寅、塩池大壞。閔壯繆以陰兵与蚩尤大戰而破之、始為之建祠。至崇寧元年、加封閔為忠惠公。大觀二年、又加武安王。
- 18) 胡天成・段明編『民間祭礼与儀式戲劇』（貴州民族出版社・1999年）108頁。
- 19) 前掲『繪図三教源流搜神大全』200頁。
- 20) 原文：東鄉間、姓田名華者、乃正東二七神也。（略）誕時、白昼憑空霹靂、火光照天。（略）至長、遂因田為田、指華為畢。（略）時女媧氏五色土補天、百計不成、帥助木火之精、霹碎玄精之石髓。（略）又練五色火電風雷陣、上助軒轅擊死蚩尤。（略）玉帝封以雷門畢元帥之職、勅掌十二雷霆、輔玄天上帝、誅瘟役鬼。
- 21) 前掲『繪図三教源流搜神大全』230～231頁。
- 22) 原文：雍民辛姓、名興者、字震宇。母張氏、家貧、壳薪以養母、至殷苦。（略）天帝感其至孝也、迎而封之為雷門苟元帥。与畢帥共五方事、往来行天、剪幽明中邪魔惡。
- 23) 原文：雷部有欵火大神、姓鄧、名伯温。昔從黃帝戰敗蚩尤、封河南將軍。大神見黃帝登天、遂棄位、入武当山修行百載。（略）上帝封為律令大神。
- 24) 『海瓊白真人語録』（『正統道藏』正一部S. N. 1307）
- 25) 呂宗力・欒保群『中国民間諸神』（河北人民出版社・2001年）113～128頁。
- 26) 前掲『繪図三教源流搜神大全』189頁。
- 27) 同前掲『繪図三教源流搜神大全』195頁。
- 28) 同前掲『繪図三教源流搜神大全』181頁。
- 29) 前掲呂宗力等『中国民間諸神』133～134頁の指摘によれば、雷部の神として「謝仙火」の伝承は古くから存在する。
- 30) 前掲『繪図三教源流搜神大全』228頁。
- 31) 同前掲『繪図三教源流搜神大全』242～243頁。
- 32) この部分の記載は、拙稿「太歳殷元帥考」（『論叢アジアの文化と思想』第3号・アジアの文化と思想の会・1994年）に基づいたものである。
- 33) 王充『論衡』（『諸子集成』第7卷・上海書店・1986年）240頁。
- 34) 前掲『繪図三教源流搜神大全』235～236頁。
- 35) 原文：帥者、紂王之子也。母皇后姜氏。一日后游宮園、見地巨人足迹、后以足踐之而孕、降生帥也。肉毳包裹、其時生下、被王寵愛妃名妲己、冒奏王曰、正宮產怪。王命棄之狹巷。（略）適金鼎化身申真人經過。（略）真人近而視之、乃一肉毳、曰此仙胎也。将劍剖毳、得一嬰兒。（略）又緣其棄郊之故、而乳名殷郊。（略）于是指帥助武王伐紂、至牧野、率雷震等前鋒顯威、殺商士、前徒倒戈自斃、血流漂杵。（略）玉帝聞有孝義之恩、又有斬妖之勇、遂召勅封地司九天游奕使至德太歳殺伐威權殷元

帥。

- 36) 『太平広記』（中華書局・1981年）2878頁。
- 37) 原文：上元末、復有李氏家、不信太歳、掘之、得一塊肉。相伝云、得太歳者、鞭之数百、当免禍害。李氏鞭九十余、忽然騰上、因失所在。李氏七十二口、死亡略尽。
- 38) 哪吒太子説話については、拙稿「哪吒太子考」（『道教の歴史と文化』雄山閣出版・1998年）167～196頁参照。
- 39) 馬書田『中国道教諸神』（団結出版社・1996年）69～71頁。
- 40) 『宋元平話集』（上海古籍出版社・1990年）411頁。
- 41) 馬書田『中国仏教諸神』（団結出版社・1994年）213～218頁。
- 42) 前掲拙稿「哪吒太子考」181～184頁参照。
- 43) これについては彌永信美『大黒天変相』（法蔵館・2002年）248～251頁を参照。
- 44) 黄兆漢「粵劇戲神華光是何方神聖」（『中国神仙研究』台湾学生書局・2001年）49～87頁、また呂威『財神信仰』（学苑出版社・1994年）参照。拙稿では「靈官馬元帥華光統考」（『論叢アジアの文化と思想』第5号・1996年・1～16頁）がある。
- 45) 前掲『絵図三教源流搜神大全』220～221頁。
- 46) 原文：詳老帥之始終、凡三顯聖焉。原是至妙吉祥化身、如来以其滅焦火鬼墳有傷于慈也、而降之凡。遂以五团火光投胎于馬氏金母。面露三眼、因諱三眼靈光。生下三日能戰、斬東海龍王以除水孽。繼以盜紫微大帝金鎗。（略）乃授以金磚三角、變化無辺。遂奉玉帝勅以服風火之神、而風輪火輪之使。（略）又以母故而入地獄、走海藏、步靈台、過酆都、入鬼洞、戰哪吒、窃仙桃、敵齊天大聖。積仏為之解和。（略）玉帝以其功德齊天地而勅元帥于玄帝部下。
- 47) 『華光顯聖』劇については、沈德符が批判する形で言及している。前掲沈德符『万曆野獲編』694頁参照。
- 48) 『容与堂本水滸伝』（上海古籍出版社・1988年）555頁。
- 49) 賈二強『唐宋民間信仰』（福建人民出版社・2003年）367頁。
- 50) 拙稿「萬福寺伽藍堂の華光菩薩像について」（『黄檗文華』第122号・黄檗山萬福寺文華殿黄檗文化研究所・2003年）120～124頁。
- 51) 『孤本元明雜劇』（台湾商務印書館・1977年）第九冊所収。
- 52) 『元曲選外編』（中華書局・1959年）652頁。
- 53) 馮夢龍『警世通言』（人民文学出版社・1956年）411頁。
- 54) 原文：話説故宋時杭州普濟橋有個宝山院、乃嘉泰中所建、又名華光廟、以奉五顯之神。（略）此五顯、乃五行之佐、最有靈応。或言五顯即五通、此謬言也。紹定初年、丞相鄭清之重修、添造樓房精舍、極其華整。遭元時兵火、道侶流散。（略）左右民居、

亦皆凋落。至正初年、道士募緣修理、香火重興、不在話下。

- 55) 『大惠靜慈妙樂天尊說福德五聖經』（『正統道藏』S. N. 1192）、『太上洞玄靈寶五顯靈觀華光本行妙經』（『万曆統道藏』S. N. 1448）
- 56) 前掲『繪図三教源流搜神大全』65～69頁。
- 57) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』536～561頁。
- 58) 『幽明録』（魯迅『古小説鈎沈』新芸出版社・1970年）239頁。
- 59) 前掲賈二強『唐宋民間信仰』339頁。
- 60) 前掲『繪図三教源流搜神大全』66頁。
- 61) 原文：自是神降、格有功於国、福祐斯民、無時不顯。先是、廟号止名五通。大觀中、始賜廟額曰靈順。宣和年間封兩字侯、紹興中加四字侯、乾道年加八字侯。（略）淳熙初封兩字公。理宗改封八字王号。第一位顯聰昭応靈格広濟王 顯慶協惠昭助夫人 第二位顯明昭列靈護広祐王 顯惠協慶善助夫人 第三位顯正昭順靈衛広惠王 顯濟協佑正助夫人 第四位顯直昭佑靈賜広沢王 顯佑協濟喜助夫人 第五位顯德昭利靈助広成王 顯福協愛靜助夫人 王祖父啓佑喜応敷沢侯 祖母衍慶助順慈賜夫人 王父広惠慈濟方義侯 母崇福慈濟慶善夫人 長妹喜応賛惠淑顯夫人 次妹懿順福淑靖顯夫人
- 62) 『五顯靈觀大帝灯儀』（『正統道藏』洞真部S. N. 206）
- 63) 元妙宗編『太上助国救民総真秘要』（『正統道藏』正一部S. N. 1227）
- 64) 胡文和『四川道教仏教石窟芸術』（四川人民出版社・1994年）201頁。
- 65) 前掲賈二強『唐宋民間信仰』351頁。
- 66) 前掲『繪図三教源流搜神大全』223～224頁。
- 67) 原文：帥姓温、名瓊、字子玉。後漢東甌郡人、今浙江温州是也。（略）幼而神明、七歳学歩天星、十歳通儒経伝。（略）十九歳科第不中、二十六歳明経、射策不中。（略）蒼龍墮珠于前、臥拾而含之、（略）突然幻変、面青髮赤藍身猙猛、（略）泰山府君聞其威猛、召為佐岳之神。（略）受玉帝勅旨、封為亢金大神。又封為翼靈照武將軍兵馬都部署。賜以玉環一握。（略）巨宋熙寧年間、有嗣漢三十六代天師飛清真人張君、始持符召之法、役用岳神、而得位十太保之列、首温太保之名。
- 68) 趙道一『歷世真仙体道通鑑』（『正統道藏』洞真部S. N. 296）、同『歷世真仙体道通鑑続編』（『正統道藏』洞真部S. N. 297）、及び同『歷世真仙体道通鑑後集』（『正統道藏』洞真部S. N. 298）、また『漢天師世家』（『万曆統道藏』S. N. 1463）参照。
- 69) 張虚靖の代位を三十代とすることについては問題がある。詳しくは拙稿「天師張虚靖のイメージについて」（『東洋大学中国学会会報』第7号・2000年）1～12頁を参照。恐らく張乾曜を「三十二代」としたり、この神宗の頃の天師張飛清を「三十六

- 代」とするのは、本来は何らかの別の伝承に基づくものであったと考えられる。しかし後世、張虚靖を「三十代天師」と定めてしまったために、それらの系譜と齟齬をきたすことになったものであろう。なおこれについては、また別に論じたい。
- 70) 前掲『絵図三教源流搜神大全』238頁。なお「張元帥」の項目は別に存在するため、ここでは「張真君」という名称になっている。
- 71) 原文：公姓張、名逡。(略)唐玄宗時進士出身、官拜睢陽令、遭安祿之變。(略)公負孤城、臨機应变、不依古法、前後三百余戰、百戰百克。(略)真古天地一孤忠哉。後唐宋歷封為宝山忠靖景佑福德真君。
- 72) ポール・カッツ(康豹Paul R. Katz)「道教与地方信仰：以温元帥為個例」(『台湾宗教研究通訊』蘭台出版社第四期・2002年)10~20頁。
- 73) 『地祇上将温太保伝』(『正統道蔵』洞神部S. N. 780)
- 74) 范純武「張純信仰の歴史・祀典封号及其影響」(『台湾宗教研究通訊』蘭台出版社第六期・2004年)229~259頁。
- 75) 前掲『絵図三教源流搜神大全』245~246頁。
- 76) 原文：帥有姓孟名山者、仁義孝慈、万古不磨。至今賞人心願者。觀其為獄官釈囚一事、足卜其概。(略)帥以殘冬思親、動闌門數百之泣。皆切慕親、曰、而独無母乎。無相見也。帥哀其懷膝下想、遂泣与囚約、囚亦泣与帥約、至今冬廿五日而积、来正月初五而還。果不爽一焉。
- 77) 『四遊記』(華夏出版社・1994年)225~226頁。
- 78) 前掲『絵図三教源流搜神大全』240頁。
- 79) 原文：玄帝以方坎離二業、故而辟雲於九天之下、正值帥之勇押山海、乃踏龜蛇、邀帥步虚以同昇、封為猛烈元帥。分任玄冥之寄矣。
- 80) 前掲『絵図三教源流搜神大全』233頁。
- 81) 原文：天帝亦以民之所称者封之曰、仁聖元帥。以掌四方都社令焉。帥乃左執金斧、右執瓜錘、与玉璽相周旋。
- 82) 『残唐五代史演義伝』(宝文堂書店・1983年)36頁。
- 83) 前掲『四遊記』227頁。
- 84) 陳巴黎編著『東嶽廟』(中国書店出版・2002年)21頁。
- 85) 前掲『絵図三教源流搜神大全』214頁。
- 86) 原文：帥時任漢廷尉長、案盜主玩器者以贓究、帝欲廷殺之、不聽。案以妄俸侮官儀者以笞殺、帝以齋赦之而不聽。案三老中之贓吏者、台臣以勢請之而不顧。案故友以撓法罷者、賄以幹金而不瞬目。
- 87) 『後漢書』(中華書局版)1786~1787頁。

- 88) 趙元帥の由来などについては、呂威『財神信仰』（学苑出版社・1994年）の12～25頁において詳細に分析されており、また馬書田『中国民間諸神』（團結出版社・1997年）204～208においても検討されている。
- 89) 前掲『絵図三教源流搜神大全』142頁。
- 90) 原文：姓趙、諱公明、鐘南山人也。自秦時避世山中、精修至道、功行円成、欽奉玉帝旨召為神霄副帥。按元帥乃皓廷霄度天慧覺昏梵氣化生、其位在乾、金水合氣之象也。其服色、頭戴鉄冠、手執鉄鞭者、金遘水氣也。面色黒而鬚鬚者、北氣也。跨虎者、金象也。故此、水中金之義、体則為道、用則為法、法則非雷霆無以彰其威。泰華西台其府、乃、元帥之主掌、而帥以金輪称、亦西方金象也。元帥上奉天門之令、策役三界、巡察五方、提点九州、為直殿大將軍、為北極侍御史。昔漢祖天師修煉仙丹、龍神奏帝、請威猛神吏為之守護、由是元帥上奉玉旨、授正一玄壇元帥。正則万邪不干、一則純一不二之職至重。天師飛昇之後、永鎮龍虎名山。厥今三元開壇度、其趨善建功謝過之人、頑冥不化者、皆元帥掌之。故有龍虎玄壇、實賞罰之一司。部下有八王猛將者、以応八卦也。有六毒大神者、以応天煞・地煞・年煞・月煞・日煞・時煞也。五方雷神・五方猖兵、以応五行。二十八將、以応二十八宿。天和地合二將、所以象天門地戸之闢關。水火二營將、所以象春生秋煞之往来。驅雷役電、喚雨呼風、除瘟剪瘧、保病禳災。元帥之功莫大焉。至如訟冤伸抑、公能使之解釈公平、売買求財、公能使之宜利和合。但有公平之事、可以対神禱、無不如意。故上天聖号為高上神霄玉府大都督、五方之巡察使、九州社令都大提点、直殿大將軍、主領雷霆副元帥、北極侍御史、三界大都督、応元昭烈侯、掌士定命設帳使、二十八宿都総管、上清正一玄壇飛虎金輪執法趙元帥。
- 91) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』534～535頁。
- 92) 前掲『絵図三教源流搜神大全』157頁。
- 93) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』532～533頁。
- 94) 澤田瑞穂「黒神源流」（『中国の民間信仰』工作舎・1982年）104～116頁。
- 95) 原文：元帥姓趙、名朗、一名昶、字公明。終南山人。秦時避世山中、精修至道、功行円成、被玉帝旨召為神霄副帥。（以下はほとんど注90と同文）
- 96) 拙稿「玄天上帝の変容——数種の經典間の相互關係をめぐって——」60～77頁参照。
- 97) 前掲『絵図三教源流搜神大全』178～179頁。
- 98) 原文：襄陽洛里、姓王、名悪、字秉誠。父諱臣、早逝、母邵氏、遺胎而生帥于貞觀時丙申年七月庚申日申時。帥幼孤不読、有膂力、性剛暴質直、市中有不平者、直与分憂。鋤硬撻横、国人服其公、且憚其武。第多執性、不容人分曲直、故含恩者衆、

而仇之不尽泯焉。(略)遂至荆襄間。有古廟為江怪所占、顯靈本方里、遞年六月六日會主備牛羊豬各十牽、酒十釀、免瘟。否則、人物流血而疫。遞會、貧苦者幾至鬻男女以徇之、悲声盈耳。帥惡而燒之、廟像兩燼、怪風大作。適值薩真人托藥救瘟以來、遂作法反風而滅妖、境藉以安。(略)玉帝敕封豁洛王元帥、錫金印如內篆赤心忠良四字、管天下都社令。

- 99) 前掲『繪図三教源流搜神大全』88～89頁。
- 100) 原文：薩真人、名守堅、蜀西河人也。少有濟人利物心、嘗學醫、誤用藥殺人、遂棄医道。聞江南三十代天師虛静先生及林王二侍宸道法、步往師之。至陝、行囊已尽。見三道人來、問堅何所往。堅告以故。道人曰、天師羽化矣。複問王侍宸、曰亦化矣。再問林靈素、曰亦化矣。薩方悵悵、一道人曰、今天師道法亦高、吾与之有旧、當為作字、可往訪之。吾有一法相授、日間可以自給。遂授以咒囊之術。曰咒一囊、可取七文。一日但咒十囊、得七十文、則有一日之資矣。一道人曰、吾亦有一法相授、乃雷法也。真人受辭、用之皆驗。一凡咒百余囊、止授七十文為日用、余者複以濟貧。及到信州、見天師投信、拳家皆哭、乃虛靖天師親筆也。信中言、吾与王侍宸、林天師遇薩君、各賜一法授之矣。可為參録奏名。真人後法愈大顯。(略)繼至湘陰鼎浮梁、見人用童男童女生祀本处廟神。真人曰、此等邪神、即焚其廟。言訖、雷火飛空、廟立焚矣。(略)真人至龍興府、江邊濯足、見水有神影、方面黄色巾金甲、左手拽袖、右手執鞭。真人曰、爾何神人也。答曰、吾乃湘陰廟神王善、被真人焚吾廟後、今相隨一十二載、只侯有過、則複前仇。今真人功行已高、職隸天樞、望保奏以為部將。真人曰、汝兇惡之神、坐吾法中、必損吾法。其神即立誓不敢背盟。真人遂奏帝、收系為將、其応如響。
- 101) 李豊楸『許遜与薩守堅——鄧志謨道教小説研究——』(台湾学生書局・1997年) 208～213頁。
- 102) 『搜神広記』が「峽」が峽州であるとすれば、恐らく湖北省宜昌であると思われる。『三教搜神大全』の「陝」は幾つか可能性があるが、河南省陝県、或いは陝西を指すか。しかし『搜神記大全』「蜀中」だとすれば、四川省を出ぬうちに路銀が尽きたことになる。龍虎山に向かったのであるとするなら、やはり『搜神広記』が「峽」とするのが正しいか。
- 103) 前掲李豊楸『許遜与薩守堅』211頁及び216頁。
- 104) 鄧志謨『呪囊記』(『明代小説輯刊』第一輯第四冊・巴蜀書社・1993年) 618頁。
- 105) 趙道一『歷世真仙体道通鑑』(『正統道蔵』洞真部S. N. 296)、同『歷世真仙体道通鑑統編』(『正統道蔵』洞真部S. N. 297)、及び同『歷世真仙体道通鑑後集』(『正統道蔵』洞真部S. N. 298) 参照。薩真人の伝は『歷世真仙体道通鑑統編』に収録。

- 106) 前掲李豊楸『許遜与薩守堅』212頁。
- 107) 『太上元陽上帝無始天尊說火車王靈官真經』（『万曆統道藏』S. N. 1443）
- 108) 前掲李豊楸『許遜与薩守堅』223頁。
- 109) 前掲『繪図三教源流搜神大全』181頁。
- 110) 原文：天君姓謝、諱仕榮、字雷行。於貞觀初、一輪火光如闢、直射入山東火焰山界。謝恩其父、韓其母也。帥性烈、貌惡、不屈於豪、亦不敗于法。(略) 蓋役愈苦而才愈弁、事愈險而功愈奇、赤心烈節、炳于天日。誠不虛玉帝之寵於耳目臣也。宜受職於火德天君、執金鞭、架火輪、頭頂道冠、以司亢陽之令。
- 111) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』133～134頁。
- 112) 『史記』（中華書局版）1368～1369頁。
- 113) 原文：自齊威、宣之時、騶子之徒論著終始五德之運、及秦帝而齊人奏之、故始皇采用之。而宋毋忌、正伯僑、充尚、羨門高最後皆燕人、為方僊道。
- 114) 前掲『史記』1369頁。
- 115) 原文：索隱案、樂産引老子戒經云、月中仙人宋無忌。白沢図云、火之精曰宋無忌。蓋其人火仙也。
- 116) 前掲『繪図三教源流搜神大全』428頁。
- 117) 原文：神姓宋、名無忌。漢時人也。生有神異、死而為火精。唐牛僧孺立廟祀之、以禳火災。廟在武昌府之城東七里。(略) 本朝重建俗云火星堂。今江東各所之火星廟皆其神也。
- 118) 前掲『四遊記』81頁。
- 119) 原文：玉帝聞奏大怒、便差火部元帥宋無忌入朝、帶領天兵三萬、火速前往中界捉捉華光。宋無忌得旨、即出南天寶德闕、点齊天兵、殺至中界。
- 120) 二郎神については、黄芝崗『中国の水神』（上海文芸出版社・1988年・原1934年発行）が詳しく、また前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』450～462頁において、諸家の説を検討する。
- 121) 前掲『繪図三教源流搜神大全』113頁。
- 122) 原文：清源妙道真君、姓趙、名昱、從道士李珣隱青城山。隋煬帝知其賢、起為嘉州太守。郡左有冷源二河、内有犍為老蛟、春夏為害、其水泛漲、漂淹傷民。昱大怒、時五月間、設舟船七百艘、率甲士千余人、民万余人、夾江鼓噪、声振天地、昱持刃入水。有頃、其水赤、石崖奔、吼如雷。昱右手持刃、左手持蛟首、奮波而出。時有佐昱入水者七人、即七聖是也。公斬蛟、時年二十六歲。隋末天下大亂、棄官隱去、不知所終。後因嘉州江水漲溢、蜀人見青霧中乘白馬引数人鷹犬彈弓獵者、波面而過、乃昱也。民感其德、立廟於灌江口奉祀焉。俗曰灌口二郎。太宗封為神勇大將軍。明

- 皇幸蜀、加封赤城王。宋真宗朝、益州大乱、帝從張乖崖入蜀治之。公詣祠下、求助於神、果克之。奏請於朝、追尊聖号曰清源妙道真君。
- 123) 『孤本元明雜劇』(台湾商務印書館・1977年)第十冊所収。
- 124) 原文：吾神二郎真君是也。俗姓趙、名煜。幼從道士李班、隱青城山、至隋煬帝、知吾神大賢、為嘉州太守。郡有左冷源二河、內有健蛟、春夏為害。吾神持刃入水、斬蛟而出。後棄官學道、白日衝昇。加吾神清源妙道真君。
- 125) 前掲『孤本元明雜劇』第十冊所収。
- 126) 『元曲選外編』(中華書局・1959年)961～970頁。
- 127) 原文：右符、遣清源妙道真君陳昱、崇寧真君閔羽、禁將趙旻・閔平、如役緊用。
- 128) 前掲『繪図三教源流搜神大全』103～104頁。
- 129) 原文：昔周厲王有三諫官、唐・葛・周也。(略)三官諫曰、先王以仁義守國、以道德化民。(略)屢諫弗聽、三官棄職、南游於吳、吳王大悅。(略)後知厲王薨、宣王立、復歸周國。(略)三官既昇加封侯号、唐宏、字文明、孚靈侯。葛雍、字文度、威靈侯。周斌、字文剛、泐靈侯。宋祥符元年、真宗東封岱嶽、至天門、忽見三仙自空下。帝敬問之、三仙曰、奉天命護衛玉駕。帝封三仙曰、上元道化真君、中元護正真君、下元定志真君。
- 130) 金允中編『上清靈宝大法』(『正統道藏』正一部S. N. 1223)
- 131) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』689頁。
- 132) 前掲『繪図三教源流搜神大全』118～121頁。
- 133) 廣田律子「中国江西省萍鄉市における追儼の仮面劇」(『東アジア比較文化研究』創刊号・2002年)100頁。
- 134) 原文：祠山聖烈真君、姓張、諱渤、字伯奇、武陵龍陽人也。父曰龍陽君、母曰張媪。其父龍陽君与媪游於太湖之陂、正昼無見、風雨晦冥、雲蓋其上、五祥青雲、雷電並起、忽失媪處。俄頃開霽、媪言見天女、謂曰、吾汝祖也。賜以金丹。已而有娠、懷胎十四個月、当西漢神雀三年二月十一日夜半生。長而奇偉、寬仁大度、喜怒不形於色、身長七尺、隆準美髯、髮垂委地、深知水火之道。有神告以地荒僻、不足建家、命行。有神獸前導、形如白馬、其声如牛。遂与夫人李氏東游吳会稽、渡浙江、至苕雲三白鶴山。山有四水、会流其下、公止而居焉。(略)唐天宝中、禱雨感応、初贈水部員外郎、即橫山改為祠山。昭宗贈司農少卿、賜金紫。景宗封広徳侯。南唐封為司徒、封広徳公。後晋封広徳王。宋仁宗封靈濟王。至寧宗朝、累加至八字王。至理宗淳祐五年、改封正佑聖烈真君。至咸淳二年十二月十二日、準告加封正佑聖烈昭徳昌福真君。
- 135) 前掲『宋元平話集』756頁。

- 136) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』466頁。
- 137) 例えば『明史』礼志（中華書局版）1304頁に、「初称十廟。北極真武以三月三日、九月九日、道林真覺普濟禪師宝誌以三月十八日、都城隍以八月祭帝王後一日、祠山広恵張王渤以二月十八日、五顯靈順以四月八日、九月二十八日、皆南京太常寺官祭。漢秣陵尉蔣忠烈公子文、晋成陽卜忠貞公壺、宋濟陽曹武惠王彬、南唐劉忠肅王仁瞻、元国忠肅公福寿俱以四孟朔、歳除、応天府官祭。惟蔣廟又有四月二十六日之祭。功臣廟為十一。後復増四。関公廟、洪武二十七年建於雞籠山之陽、称漢前將軍寿亭侯。嘉靖十年訂其誤、改称漢前將軍漢寿亭侯。以四孟歳暮、応天府官祭、五月十三日、南京太常寺官祭。天妃、永樂七年封為護国庇民妙靈昭応弘仁普濟天妃、以正月十五日、三月二十三日、南京太常寺官祭」とある。
- 138) 前掲『絵図三教源流搜神大全』121頁。
- 139) 田中知佐子「建長寺伽藍神像の源流について」（第五十六回日本道教会大会・2005年・専修大学における発表）からの示唆による。
- 140) 招宝七郎については、H・デュルト「日本禪宗の護法神：大権修利菩薩について」（『印度学仏教学研究』64号・1984年）128～129頁、また佐々木章格「日本曹洞宗と大権修利菩薩」（『曹洞宗宗学研究所紀要』創刊号・1988年）32～45頁、及び中世古祥道「招宝七郎大権修利菩薩について」（『宗学研究』35号・1993年）232～237頁などを参照。
- 141) 前掲『容与堂本水滸伝』1030頁。
- 142) 『元曲選外編』（中華書局・1959年）652頁。
- 143) 天后媽祖については、朱天順『媽祖と中国の民間信仰』（平河出版社・1996年）、林美容『媽祖信仰与漢人社会』（黒龍江人民出版社・2003年）、李露露『媽祖信仰』（学苑出版社・1994年）、徐曉望・陳衍徳『澳門媽祖文化研究』（澳門基金会出版・1998年）など、数多くの研究業績がある。
- 144) 李猷璋『媽祖信仰の研究』（泰山文物社・1979年）57～92頁。
- 145) 前掲『絵図三教源流搜神大全』186～187頁。
- 146) 原文：妃姓林、旧在興化路寧海鎮、即莆田県治八十里浜海湄州地也。母陳氏、嘗夢南海觀音与以優鉢花、吞之、已而孕。（略）以唐天宝元年三月二十三日誕生、誕之日、異香聞里許、経句不散。（略）五歳能誦觀音経。（略）年及笄、誓不適人、即父母亦不敢強其醮。居無何、儼然端座而逝。（略）我国世祖文皇帝七年、中貴人鄭和通西南夷、禱妃廟。（略）遂勅封、護国庇民妙靈昭応弘仁普濟天妃。
- 147) 前掲李猷璋『媽祖信仰の研究』60頁。
- 148) 前掲朱天順『媽祖と中国の民間信仰』14～15頁。

- 149) 前掲『絵図三教源流搜神大全』432頁。
- 150) 原文：妃莆人、宋都巡檢林愿之女。生而神靈、能言人禍福。没後鄉人立廟于湄州之嶼。(略) 歷代累封至天妃。
- 151) 前掲李猷璋『媽祖信仰の研究』66～67頁。
- 152) 前掲李猷璋『媽祖信仰の研究』69頁。
- 153) 南州散人『天妃林娘娘伝』（『中国神怪小説体系・怪異巻四・天女地魅伝』遼沈書社等・1992年）5～96頁。
- 154) 前掲『絵図三教源流搜神大全』183～184頁。
- 155) 前掲『絵図三教源流搜神大全』435～436頁。
- 156) 前掲呂宗力・樂保群『中国民間諸神』320～322頁。また林国平・彭文字『福建民間信仰』（福建人民出版社・1993年）162～180頁など参照。
- 157) 前掲李猷璋『媽祖信仰の研究』67頁。
- 158) 前掲李猷璋『媽祖信仰の研究』71頁。なお、引用に際しては、旧漢字及び旧仮名遣いを改めている。
- 159) 前掲『絵図三教源流搜神大全』318頁。
- 160) 前掲『絵図三教源流搜神大全』192～193頁。
- 161) 前掲『絵図三教源流搜神大全』197頁。
- 162) 前掲『絵図三教源流搜神大全』202～203頁。
- 163) 前掲『絵図三教源流搜神大全』206頁。
- 164) 前掲『絵図三教源流搜神大全』209頁。
- 165) 前掲『絵図三教源流搜神大全』217～218頁。
- 166) 大淵忍爾編『中国人の宗教儀礼——仏教・道教・民間信仰』（福武書店・1983年）248頁。
- 167) 前掲『絵図三教源流搜神大全』226頁。
- 168) 葉明生校訂呉乃宇記述『福建寿寧四平傀儡戲華光伝』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・2000年）
- 169) 李懷燕『湖南省黔陽県湾溪郷の観音醮和辰河木偶戲香山』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1996年）
- 170) 余大喜・劉之凡『江西省南豊県三溪郷石郵村的飛儺』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1996年）
- 171) 蒙国荣『広西省環江県毛南族的還願儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1994年）
- 172) 胡天成『接龍喪戲——重慶市巴県接龍郷劉家山合作社楊貴馨五天仏教喪葬儀式之

- 調査』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・2000年）
- 173) 曹琳『江蘇省通州市橫港鄉北店村胡氏上童子儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1995年）
- 174) 茆耕茹『胥河兩岸的跳五猖』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1995年）
- 175) 王躍『四川省江北縣舒家鄉上新村陶宅的漢族祭財神儀式』（『民俗曲芸叢書』施合鄭民俗文化基金会・1993年）
- 176) 田仲一成『中国巫系演劇研究』（東京大学出版会・1993年）